

二〇二五年度 第六回

# 泥流地帯

作文コンクール  
応募作品集

主催 『泥流地帯』映画化を進める会  
協力 三浦綾子記念文学館  
上富良野町教育委員会





二〇二五年度

# 第六回 泥流地帯作文コンクール作品集

募集期間 二〇二五年六月～九月

応募資格 特になし

応募作品数 28 作品

△選考委員▽

三浦綾子記念文学館 館長 田中 綾

上富良野町教育委員会 教育長 鈴木 真弓

上富良野町郷土をさぐる会 会長 和田 昭彦

上富良野町 みんなの読書会 主宰 大道千アキ

(選考委員長)『泥流地帯』映画化を進める会 会長 青野 範子

主権 協力

『泥流地帯』映画化を進める会

三浦綾子記念文学館

上富良野町教育委員会



## 目次

△はじめに▽	1
△優秀作品選考審査結果▽	2
△一般の部▽	
■十勝岳を旅して / 渡辺元紀	4
■『再びの泥流地帯』と三浦綾子先生に捧ぐ / 堀川一彦	6
■聖書から読み解く「泥流地帯」 / 篠原謙一	6
■静かな怒りを抱えて、土を耕す 「泥流地帯」を現代に読む / 稲田亨	12
■『続・泥流地帯』を読んで思うこと / 林文字	13
■耕作のような人に魅かれます！ / (P.N) なべとも	14
■死を描く / 清家亮太	14
■我が家に伝わる泥流地帯 / 田中正人	15
■拓一にとつての善果 / (P.N) 星野怜	17
■理不尽な泥に刻まれた、祈りの地平 / (P.N) みわ	18
■「泥流地帯」と三浦綾子さんへ / 松野富子	20
■訪問 / (P.N) ニモ	22
■泥流を超えて——百年後の声 / (P.N) ハチベエ	30
■暗い文学としての「泥流地帯」の位置づけ / (P.N) 吉村うにうに	31
■語りつがれる大正泥流 / 岩男 香織	32
■愛すべきは耕作の人柄 / (P.N) くうりん	39
■巻造と MAKIZO / (P.N) まるごと紅はるか	40
△児童生徒の部▽	
■泥流地帯(ハッピーエンド) / (P.N) たいやきくん	44
■雫羽の鳩 / (P.N) まろ	44
■幸せのその先へ / (P.N) しまるん	45
■泥流地帯を読んでみて / 下村将人	46
■じつちゃんが生きていたら / 添田のあ	46
■未来に繋がる小説 / 西塚樹生	47
■もし中学に行っていたら / 羽澤成未	48
■泥流地帯のその後 / 松田悠来	49
■出会えてよかった / 松谷心	50
■泥流地帯が地元の人の感想 / 宮尾星	51
■泥流地帯の衝撃的だった五つのポイント / 村上大和	52
△資料編 史実としての『泥流地帯』▽	53

■はじめに

はじめに『泥流地帯』作文コンクールが開催されたのは二〇二〇年。新型コロナウイルスが猛威を振るい、自宅で過ごす機会が増えたことを機に、三浦綾子文学、特に現在上富良野町が実写映画化に取り組んでいる『泥流地帯』『続泥流地帯』の原作小説を多くの人に読んでいただきたい——そんな素朴で切実な願いから生まれた企画です。

児童生徒の皆さんはもちろんのこと、大人になり「読書感想文」を書く機会から遠ざかってしまった方々にも、読後の思いを言葉にすることで得られる新たな気づきや面白さ、そしてそれを他の読者や三浦文学ファンと共有できる喜びを味わっていただきたい。そうした思いから対象年齢や文字数、内容に関する制約を一切取り払い、何でもアリの募集を続けています。

一時的な取り組みとして始まったこのコンクールも、過去五回の開催すべてにおいて予想を大きく上回るご応募をいただき、今回主催者も(毎年)びっくりの六回目を迎え、全国から28編のご応募をいただいたところですよ。

どの応募作品も三浦文学愛、泥流地帯愛にあふれ、さまざまな視点から深くていねいに読み解かれたものばかり。読者同士で互いの理解を深めること、また『泥流地帯』を未読の方にも本を手にとる大きなきっかけになるのではないかと、この期待から、ご応募いただいた皆様のご理解とご協力のもと、例年どおり作品集発刊のはこびとなりました。

実写映画化を間近に控えた今、本作品集が原作小説『泥流地帯』『続泥流地帯』をお読みいただく、または再読いただく機会となることを心から願っています。

■実写映画化プロジェクト

小説『泥流地帯』『続泥流地帯』の舞台となった上富良野町では現在、実写映画化のプロジェクトとして官民連携した取り組みが進められています。

実写版『泥流地帯』は民間事業者による全国公開の興行作品として製作される一方で、ふるさと納税により企業・個人から広く資金を募っています。

映画本編エンドロールにご寄附いただいた皆様のお名前を掲載するほか、エキストラ出演やイベント参加特典などをご用意しています。皆さんも映画作りに参加してみませんか？

みんなで撮影る  
みんなで出演る

三浦綾子  
泥流地帯  
実写映画化プロジェクト

100年先のために  
再び鏡を覗いた上富良野の開拓者  
先人が語り継いでくれた  
美しく豊かな故郷の物語を  
全国のスクリーンへ

北海道 上富良野町 / (協力) 三浦綾子記念文学館

「泥流地帯」映画化を進める会 / ロケサポートかみふらの  
〒070-0001 上富良野町役場公民館二階光臨 (070-0001) 北海道 上富良野町役場公民館二階  
TEL 0167-45-6983 deiryu@movie-kamifurano.com

ふるさと納税で  
もらえる！  
泥流地帯文庫型  
スマホケース  
※各機種対応

公式Xで  
情報発信中

映画化  
プロジェクト  
webページ

# 優秀作品選考結果

△選考委員▽

三浦綾子記念文学館 館長 田中 綾

上富良野町教育委員会 教育長 鈴木 真弓

上富良野町郷土をさぐる会 会長 和田 昭彦

上富良野町 みんなの読書会 主宰 大道千アキ

(選考委員長)『泥流地帯』映画化を進める会 会長 青野 範子



最優秀賞

訪問

(P.N)

二七

【選評】▽スピンオフドラマとして、父子二世代の葛藤と理解、成長までのプロセスを感動的に描いている。拓一の長いセリフもよく計算されており人物構築が巧み。惜しいのは、タイトルだろうか。もう少し劇的なもののほうが良かったかもしれない。▽作者が触れなかった耕作と愛之助の確執を、やわらかなタッチで書かれており、拓一と耕作の存在がより一層高められていて素晴らしい▽災害からの復興に至る人物関係において、その家族の視点からの心情の動きが表現され、引き込まれてしまった▽物語の中では描かれていない愛之助のお見舞いの場面ですが、きっとこのようなエピソードを綾子さんも書こうとしていたのではないかと思うほど、作品や人物像をよく理解されていると感じた。読み物としての面白さが秀逸

優秀賞

理不尽な泥に刻まれた、祈りの地平

(P.N)

みわ

【選評】▽特に主人公たちの生き様を細かく論評しており、「泥流地帯」がただの災害文学ではなく「いかに生きるべきか」という問いに対する開拓者たちの魂を削った答えであり、祈りの書であるとの結びが良い▽人生における善因善果と悪因悪果について考えるべきことに強くふれられている▽「泥」に着目した視点、また、文章がとても上手で素晴らしい、よくまとまっていると感じた。私も「誠実さという鍬」を持ち続け、自分の人生という畑を耕して生きていきたいと感じた。

佳作

十勝岳を旅して

(P.N)

渡辺 元紀

【選評】▽文学散歩が、本格的な十勝岳行につながったという、その脚力と行動力とに率直に感銘を受けた。叙述にもリアリティがあり、ドキュメンタリータッチのエッセイとして味わえた▽三浦作品のファンであるという筆者の旭川や上富良野への文学散歩や十勝岳登山などの様子が、とても生き生きと伝わり嬉しくなるような心持がした

## 佳作

我が家に伝わる泥流地帯 田中正人

【選評】▽『泥流地帯』という作品が、同時にさまざまな人々の「泥流地帯物語」を内包していることを伝える、貴重なドキュメンタリー。「土の会」の方々の記録や記憶は、小説を超えて語り継がれてゆくべきものと感じた▽先代から引き継がれた土地を守り、百年を経て、心新たに回想される文体は見事▽当時の吉田村長や拓一と同じく苦勞をされた事で、又作品を違った目線で読まれていると感慨深く読ませていただいた

## 佳作

語りつがれる大正泥流 岩男 香織

【選評】▽今日公開が進んだ各図書館データベースやアーカイブ資料を駆使し、文学史のみならず北海道映画史、上富良野町史も更新しようとする意欲的な取り組みに敬意を表する。今後も引き続き最新の知見をお寄せいただきたい▽沢山の資料や文献、また、吉田村長の娘さんであるていさんの記憶など入り交え、研究論文を拝見しているようで、よく調べられているなど感心。今まで知らなかった情報も得られたことに感謝



## 最優秀賞

もし中学に行っていたら

羽澤 成未 (上富良野高)

【選評】▽本編の設定を飛躍させた「もしも…」の話ですが、多様な進路選択という「自分ごと」の課題にからめて考えてくれた点に好感をもちました。誰もが悩むけれども、他者からアドバイスをもらえぬこともある、という気づきにもつながっています▽泥流地帯の作品にはさまざまな分岐点があると捉え、耕作の生き方に新たな展開を考えると共に、自分が悩んでいる進路の選択を作品から学んでいます▽耕作が中学進学をあきらめた事と進路に悩む自分をおして心情が語られています▽筆者がまさに進路に悩んでいらして、耕作に親近感を持って読んでいる様子が伝わってきました。その大事な時にこの作品に出会っていただけで、良かったと思います

## 優秀賞

吉羽の鳩

(PN) まろ (上富良野高)

【選評】▽『泥流地帯』の世界を、上空から、鳩の視線で新たに語るという発想がまず評価に値します。しかも、鳩の「僕」は、仲間が被害を受け移動することになりますが、そんな厳しい状況の中でも人間たちに関心を寄せており、そのやさしさが印象に残りました▽鳩を擬人化して客観的に作品を捉えたことが面白い。内容的にもう一步踏み込めたらなお良いです▽鳩をとおして、物語を俯瞰している状況が描かれています。文脈をもう少しふくらませ、泥流だけではなく他の場面の記述もあると良いです▽鳩の目から見た泥流災害、とても新しい視点で頭の中に映像が浮かんできました。絵本になっても良いかも、と思わされる作品でした

## 一般の部

## 十勝岳を旅して

渡辺 元紀



七年前、たまたま書店で手にした三浦綾子作品にすっかり魅了され、それからというものが綾子先生の著作をむさぼるように次々と読み続けた。読むだけでは飽き足らず、旅好きの私は取りつかれたかのように毎年、旭川を始めとして作品に登場する舞台を訪れている。作品に描かれた場所を訪れると、それまで空想で思い描いていた景色が、まるで映像のように文章と合致した。

感銘を受けた作品があまたある中、泥流地帯もまたそのひとつである。拓一と耕作兄弟は今の私とは親子以上の年齢差があるが、彼らのすがすがしきには常に襟が正される思いがする。綾子先生のいくつかの作品は繰り返し何度も読んでいたが、泥流地帯もそのひとつである。旭川を訪れた時に何回か上富良野を訪れている。鉄道で向かう時には、母の佐枝を迎えに行くことがかなわなかった良子の無念を思い、レンタカーで移動する時には、観覧車が聳える

深山峠でひと息つくると耕作の遠足のことを思い出す。上富良野の市街に入ると、ピンポイントの場所こそわからないが、耕作が勤務する学校や通勤途上にある豆腐屋、深雪楼、そして上富良野神社の祭礼で、山車の上で淋しげな微笑を浮かべて福子が踊るシーンなどが次々にフラッシュバックされてくる。

何度か文学散歩をしているうちに、十勝岳に登ることを思いついた。市三郎が入植してから三十年、幾多の試練に翻弄されながら、ほんの僅かによく暮らしが楽になったところへ、開拓者たちの長年の苦勞を一瞬にして流し去ってしまった十勝岳大噴火による山津波の泥流。自然を前に人間の力なぞ無力としか言いようがない。麓に暮らす人々のささやかな夢と希望を打ち砕いたその元凶となったところも歩いてみたいと閃いた。泥流地帯の本文には十勝岳山頂付近についての描写は出てこないが、そこを歩くのもまた文学散歩であろうという気がした。

私は十年以上前から山歩きを始め、これまでに八十に近い山行に出かけた。旭川の街を歩いている時に眺める大雪山が大変に秀麗で、いつか歩こうと思っていた。そうなれば、十勝岳にも行こうと思うのは泥流地帯に感銘を受けた者としては当然の帰結である。運が悪いのか、

大雪山とは違い十勝岳連峰は一度も見たことがなかった。常に山頂には雲がかかり、裾野は見られることはあっても、十勝岳や美瑛岳の雄姿を拝めたことがない。それ故に、たとえ眺望を楽しむことは出来なくても、せめて十勝岳のピークを踏めたらそれでいいやという想いで上富良野へと旅立った。欲を言えば、せめて大正火口さえ見られれば。

二〇二五年六月二十一日五時〇七分、望岳台を出発する。

週末だけあって、十勝岳に向かう人は多い。そのため、ヒグマに遭遇することはまずないだろうと安直に考えた。出かける前の天気予報では曇りのち雨であったが、その予報では雨が降るのは夕方からだったので、どうかその予報が当たってくれますようにと念じながら歩いた。するとどうであろう、太陽が姿を見せることはほぼなかったものの、雲の流れが速いために十勝岳がその雄姿を見せてくれている。旭川を初めて訪れてから六年、ようやくにしてその雄々しき姿を拝むことが出来た。

雲の流れを速くしてくれる風が台風並みに強い。十勝岳はいつもこのような風が吹き荒れているのだろうか？ その爆風のために、行く道を阻まれることが幾度もあった。場所によっては、気を抜いて歩いていると風に吹き飛ばさ

れて谷底に突き落とされそうになるので、慎重に歩を進める。

一歩一歩を噛みしめるように、いつも以上にゆつくりと歩く。元来、足が速いほうではないので後から来た人たちに次々と抜かれていく。だが気にはしない。拓一や耕作を始めとした登場人物たちに思いを馳せながら歩く。

火山のせいかな、樹林帯のない山域のところどころに、太古の昔から風雪に耐えて根を張り続けてきたメアカンキンバイやイワカガミなどの高山植物が可憐に小さく咲いている。たまに立ち止まってそれらの花を愛でながら、相変わらずのスローペースで歩いていく。活火山らしく、時折硫黄臭が漂ってくる。思えば、活火山を歩くのはこれが初めてである。

山頂に近づいて、ようやく大正火口を見るのが出来た。望岳台から数時間かけてたどり着いたが、大正泥流は僅か数分で街とそこで暮らす人々の想いを飲み込んでしまったことを考えると、何ともやるせない気がした。

遅まきながら、九時一〇分に十勝岳山頂に到着。大雪山に続く、二座目の北海道のピークである。相変わらず雲は速く流れ、厚い雲が風に吹かれてやってくる。とまわりの何もかもが見えなくなってしまうが、何時間も歩いてきたことへのごほうびか、たまに雲が切れると、下界

の景色と合わせて幾筋の立ちのぼる噴煙も見ることが出来た。あらかじめ山歩き用の地形図を購入して、『日新』と表記されているところに印をつけ、それを山頂で拡げて場所を確認する予定であったが、あまりの強い風の為に地図を拡げることが出来ず、ただその方向の景色を眺めるだけとなってしまった。

山頂から眺める景色は、北海道らしい穏やかな光景が続いている。畑が拡がり、家並みがある。しかし思えば、百年近く前にその一部は泥流によって埋め尽くされたのである。そこから人々は絶望することなく、ゼロから立ち上がったのである。今のように重機もない時代、人力を主体に新たな街を構築したことは、今を生きる私にはとても想像することが出来ない。

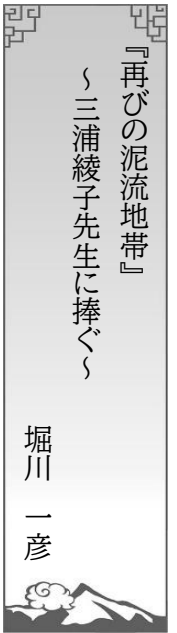
あまたの愛するものが一瞬にして流され、無力感に陥った耕作が、真面目に生きていても馬鹿くさいと投げやりな気持ちになってしまふのは、大災害を経験したことのない私でもわからないことではない。まして、拓一が上富良野を離れることを拒み、誰もが無理であろうと考えた故郷の農耕の復興を信じて一心に鋤を振るう姿を見るにつけ、それこそ馬鹿くさいと思っただことであろう。

だが拓一は違った。じつちゃんやばっちゃん、亡き父や長く家を離れていた母が明日を信じ

丹精込めて育ててきた土地にて再び実が成ることを願い、途方もない数の埋もれている流木を飽くことなく掘り起こし、硫黄分を大量に含んだ泥流を取り除き、果ては心ない輩の罵詈雑言に耐え、その揚げ句に作物が実らないかも知れないことに不安を覚えながら…。

耕作の問いかけに対して、拓一はこたえた。「そうか、馬鹿くさいか。俺はな耕作、あのまま泥流の中で俺が死んだとしても、馬鹿くさいとは思わんぞ。もう一度生まれ変わったとしても、俺はやっぱ真面目に生きるつもりだぞ」泥流地帯のことを思い出す度に、いつもこの拓一のセリフが脳裏に浮かぶ。真面目に生きる事が軽んじられている今の時代を過ごす我々に向けて問いかけられているように思われる。

最後に、じつちゃんとばっちゃん、良子を助ける為に自分の命を顧みることなく泥流の中に飛び込み九死に一生を得た拓一が、福子と幸せな人生を送ることを願ってやまない。



『再びの泥流地帯』  
 ～三浦綾子先生に捧ぐ～

堀川 一彦

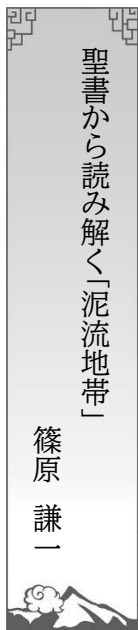
④読み終わっては先生の思い残した  
 事もあり(!?)

再び読んで『泥流』の史実通して

ありのまま

『映画化』なって 弔うや

(了)



聖書から読み解く「泥流地帯」

篠原 謙一

一、試練の意味

三浦綾子さんの本には、「悪人だけでなく善人もなぜ災難に合わなければならぬのか。」という問いかけがしばしば登場する。そして小説「泥流地帯」「続泥流地帯」の主人公の耕作も、兄拓一にこのことを繰り返し問いかけたのであった。しかし拓一はこれにいら立つのでもなく、黙々と心を込めて日々の仕事に打ち込む。「続泥流地帯」の中盤で耕作の母佐枝が聖書のヨブ記の箇所を耕作に読むように勧めたシーンが登場するのは、作者の単なる思い付きではなく、この小説の重要なモチーフとしてあらかじめ備えられたものである。

旧約聖書ヨブ記のあらすじを簡単に紹介する。

神はヨブが神の前に正しい者だと言った。それを聞いたサタンはヨブがあなたの前に正しいのはヨブがあなたから祝福を受けているからだと言った。そこで神はサタンに、ヨブを打つことを許した。ヨブは肉親や家畜などの多くの財産を失った。しかしヨブはそれでも神を恨まなかった。そこでサタンはヨブがあなたを恨まない

③ひとつ大きな 災害で 心は一つ  
 防波堤(!?)  
 さすれど中に いろいろと 人間の事  
 ありますが(!?)  
 自然の姿 むき出しに(!?)

②それでも三浦 先生は 思い出の人や  
 愛の人  
 はじめは一家 日常の いろんな話し  
 ちりばめて  
 「あれやこれや。」と せまります(!?)

①三浦先生 思い出し 『泥流地帯』  
 読んでみた(!?)  
 こわい話で スラスラと 最後通して  
 読むほどに  
 自然の姿が むき出しに(!?)

のは、その身が健康だからと言った。そこで神は再びサタンにヨブを打つことを許した。しかし神は命だけは取ってはならないと言った。ヨブは全身に腫物が出来て人前に出れないようになった。ヨブの妻はヨブを罵るほど悲しんだ。しかしヨブは「あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」(ヨブ記2章10節)と神を褒め称えた。

その後三人の友人が現れる。三人の友人達は最初は慰めの言葉をかけていたが、果てしないやり取りが続くとヨブの今の状態はあなたの罪の結果であるとヨブを非難するようになった。これに対してヨブは激しく自分の潔白を示そうとしたが、そこに神が語りかけた。「無知の言葉をもって、神の計りごとを暗くするこの者はだれか。」(ヨブ記38章2節)と。そしてヨブは悔い改めた。

しかし一方で神は三人の友人に厳しく怒りを示した。そしてヨブの所に行き罪の許しのための燔祭(生贄)をささげなさいと言った。ヨブが三人のために祈るとき、三人は赦されるであろうと。そしてヨブが三人のために祈った後、神はヨブの繁栄を元に返し、すべての財産を二倍に増された。

「泥流地帯」「続泥流地帯」の主要なこのモチーフは更に重要な展開を持つ。旧約聖書の中にはイエス・キリストの御姿がかくされているということは、多くのクリスチャンが教会の説教の中で学ばされているが、全く潔白の身であるヨブの試練を通して、悔い改めの祈りを捧げた後、恵みを受けるそのプロセスが、イエス・キリストの十字架の死と復活、更には、悔い改めそれを信じる者に多くの恵みが与えられることを暗示するのである。そしてこの小説は、神が次の二つの御言葉を私たちに与えるために三浦綾子さんを用いて書かれたと確信する。

イエスは答えられた、「本人が罪を犯したのもなく、また、その両親が犯したでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。ヨハネによる福音書9章3節

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。ヘブル人への手紙4章15節

この問題に関する小説「続泥流地帯」の核心の部分を二箇所引用させていただく。

一つ目は耕作の兄拓一の言葉。

「それはな、国ちゃん。何て言ったらいいのかな。俺は、こんなふうにいるんだよ。ここに米が実るかどうか。少なくとも、三年経ったらわかるだろう。三年経って、もし実らないとわかったら、その時は俺も諦める。すると人は言うだろう。その三年の苦労は水の泡だったってな。」「しかし、俺はね。自分の人生に、何の報いもない難儀な三年間を持つということとはね、これは大した宝かもしれないと思っている。」「実りのある苦労なら、誰でもするさ。しかし、全く何の見返りもないと知って、苦労の多い道を歩いてみるのも、俺たち若い者のひとつの生き方ではないのか。」

二つ目は耕作の母佐枝の言葉。

「ええ、母さんもね、これはいろいろ考えたことだし、お話も聞きましたよ。母さんに話してくれた牧師さんはねえ、「神は愛なり」ってそのことだけを信じていたらいいって「修平さん、わたしには上手に説明できませんけどね。今、拓一が言ったように、人間の思いどおりにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですからね、苦難に会った時に、それを災難と思って嘆くか、

試練だと思って奮い立つか、その受けとめ方が大事なのではないだろうか」

これらの言葉は、災難に遭ってそれを試練として受け止めることを通り抜けた者だけが語ることでできる特権である。これを拓一は宝と言った。そしてもう一つ非常に大事なことは、全ての試練の中心にイエス・キリストが同伴してくださいるということである。

## 二、女性たちの苦難

「続泥流地帯」での試練の克服の前に、その前編である「泥流地帯」では、噴火の災害以前にも様々な苦難が人生にもたらされていることを強烈に描写する。しかもそれは女性たちの苦難が著しい。夫に先立たれた佐枝は、裕福な市街地で遊郭を営んでいる深城から言い寄られて、更には義父とのあらゆる関係を吹聴されて住む土地を追われた。その後、手に職を付けようと髪結いの習いをしている最中に病となり、子供たちと遠く離れて過ごす時間が更に増し加えられてしまった。隣に住む福子は父親の博打と酒の借金のかたに深城の遊郭に売られて死にたいと願うようになった。耕作の姉富は武井との念願の結婚を与えられたが、武井の家族の冷酷な扱いに涙に暮れる日々を過ごした。本

来裕福である深城の娘節子は、悪魔のような父親の呪縛に絶望して毎日を過ごした。これらの女性たちの幸せへの道はいったい何なのかというところに焦点が当たるように物語は進んでいくが、農村地の貧困という言葉は小説の中ですら私たちに想像できない位に厳しい。

ここで話は少し耕作と兄拓一のことに触れさせていただく。災害前の耕作の試練は、貧しい農村に育ち、経済的な理由で中学校に進めなかったというもので、しかも福子と節子に思いを寄せられるという比較的恵まれた状況であった。最初私には、なぜ主人公にこのような役割を設定したのか、作者は耕作に何を期待したのかわからなかった。一時であるが自分の中学校進級のことと家族に負担をかけることに同意したり、帰ってきた母のことをそっけないと感じたり、福子や節子の縁談の話を他人事のように聞いたりする姿は必ずしも印象の良いものではない。しかし明らかに耕作は三浦綾子さんの投影であると思うし、教師という職業も、二人の異性に思いを寄せることも、三浦さんご自身の経歴を反映させたものだと感じた。物語は進み、耕作は子供たちに詩を書く授業で、自分が見たままの本当のことを書くようにと指導するようになる。世の中に迎合して本

心を隠して生きることの抑圧を我慢できないようになった耕作は、尊敬する兄の、愛に生きる姿に影響させられていく。耕作のありのままの描写が、読者自身への問いかけを促し、成長させられる。これこそが耕作の役割だったのだ。

拓一は父母がいない中で一家を支え、自分が働いて耕作を中学に行かせようしたり、遊郭に売られた福子のために竹筒に小銭をためたり、そして噴火の時には家族を助けようと泥流に飛び込んだりした。町の復興反対集会の中で、一人復興賛成の異議を唱え批判を浴びたり、重労働を惜しまず酸性泥土の畑を耕したり、反対派の人間に耕作が襲われそうになったのを助けて自ら足を折ったりするなど、真の英雄である。そんな他人のために労を惜しまない拓一が、唯一本心を露わしたのが、遊郭での福子の常連客である相手を、相撲大会の優勝決定戦の一番で本気で負かせたことだった。わたしは三浦綾子さんが、この拓一の中にイエス・キリストを(あるいはイエス・キリストの愛を)住まわせたのだと思った。

話は女性たちのことに戻る。先に書いた女性たちが幸せになるには一定の法則があった。自分というものを見つめ、家族関係から(親子関

係から離れて、一個人の自立を目指し、勇気ある一歩を踏み出すこと。そして親子関係よりも、夫婦関係の第一とする人生を歩みだすことである。「泥流地帯」、「続泥流地帯」の女性たちは次のようにして飛び立って行った。

・佐枝がはじめを続ける田舎町の人々から離れて、都会に出て手に職を付ける。そしてそれがイエス・キリストとの出会いを導いた。

・富が結婚して一旦は武井の家族に苦しめられるが、やがて武井と富は二人だけで硫黄採掘所に移り住む。

・福子は親に売られて深城の遊郭に捕られるが、時を経て旭川の活動家に未来を託して旅立つ。

・節子は深城という愛のない父親を恨んでいたが、自分の結婚についてだけは父親に従うのを拒否して、自分の愛を貫くために家を出る。

キリスト教の日曜学校で「あなたの父と母を敬え。」という聖書の言葉を、「神様はあなたのお父さん、お母さんのような愛のあるお方です。その神様がこのようにおっしゃっているのです。」と言った先生がいた。私は中には傷つく子供がいるのではないかと思った。そして私自身は「キリストこそ家のない子供、愛が与えられない子供たちに愛を与えることのできる唯一の存在

だ。だから父母を尊敬し感謝しつつも、これから一人で歩むときには本当の父を愛しなさい。」と真実を語れる存在になりたいと思った。教会でもあまり明確に語られないが、三浦綾子さんが困難の中にある女性たちに語りかけた言葉とは次のようなことではないのか。

イエスは知らせてくれた者に答えて言われた、「わたしの母とは、だれのことか。わたしの兄弟とは、だれのことか」。そして、弟子たちの方に手をさし伸べて言われた、「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。マタイによる福音書12章48〜50節

それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。創世記2章24節

三、小説に見るイエス・キリストが通られた道  
小説の中に登場する人々は、イエス・キリストが負われた困難であるとか、父なる神様のための貴重な働きを、それぞれ自分の与えられた賜物を生かして、自分らしく乗り越えていく。私たちは死を願い、人生に絶望していかないだろうか。三浦綾子さんは「私たちの通った道は、イ

エス・キリストも通られたのですよ」と繰り返して語っておられる。

(1)「泥流地帯」に見るイエス・キリストが通られた道

①耕作が深城に石を投げる(P33)、百姓だと馬鹿にされる(P163)、大工仕事をする(P77、その他各所)

「この人は大工ではないか。マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここにわたしたちと一緒にいるではないか」。こうして彼らはイエスにつまづいた。マルコによる福音書6章3節

②福子が売り飛ばされる(P170)

「彼をあなたがたに引き渡せば、いくらくいただきますか」。すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。マタイによる福音書26章15節

③富が涙を流す(P193)、福子が死にたいと言う(P351)

なにゆえ、悩む者に光を賜い、心の苦しむ者に命を賜ったのか。このような人は死を望んでも来ない、これを求めることは隠れた宝を掘るよりも、はなはだしい。ヨブ記3章20〜21

④福子の踊りを見て拓一は涙を流す(P 262)。  
 (「続泥流地帯」佐枝が泣きながら祈る(P 201) )

イエスは涙を流された。ヨハネによる福音書 11章 35節

⑤市三郎の教え(P 276)

それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、しかもあからさまに、この事を話された。マルコによる福音書 8章 31〜32節

⑥富が草の山を背負う(P 281)

彼らがイエスをひいてゆく途中、シモンというクレネ人が郊外から出てきたのを捕えて十字架を負わせ、それをになってイエスのあとから行かせた。ルカによる福音書 23章 26節

⑦馬の青が死んだのは自分がかんぬきを忘れたからと拓一は言った(P 317)

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだ。しかし彼はわれわれの故のために傷つけ

られ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。イザヤ書 53章 4〜5節

⑧竹筒にお金を貯める(P 349)

「よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」。ルカによる福音書 21章 3〜4節

⑨まんまを炊いた詩(P 385)

「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」。イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。ヨハネによる福音書 6章 9〜11節

⑩福子を背負って助け出す耕作(P 492)

わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。イザヤ書 46章 4節

(2)「続泥流地帯」に見るイエス・キリストが通られた道

①拓一は復興することが大切だと演説した(P 166)

イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それなのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」。ヨハネによる福音書 2章 19〜20節

②形式にとらわれた心のない詩を子供たちが書いた時(P 348)

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。だから、もつときびしいさばきを受けるに違いない。」マタイによる福音書 23章 14節

③泥棒村長と言われたとき、泣き出す村長の

子供を耕作が抱き上げる(P 396)

よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」。そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。マルコによる福音書 10章 15 ～ 16節

④ 拓一が足を折るけがをする(P 485)

そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。しかし、彼らがイエスのところに来た時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。ヨハネによる福音書 19章 32 ～ 33節

⑤ 吉田村長が裁判で訴えられる(P 492)

するとピラトは、また出て行ってユダヤ人たちに言った、「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出す、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。ヨハネによる福音書 19章 4節

四、イエス・キリストに仕えることで真の自由を得る

拓一の心にもたらされた愛は、母佐枝の祈りによるものであったに違いない。そしてそれら

はイエス・キリストによってもたらされた。拓一

が復興を志した時、耕作、国男、修平はその努力は無駄だと問うた。これはヨブ記に出てくる三人の友人たちを思い出させる。しかしそこに神の力が働いた。神の力に支えられた拓一の姿を見て、その愛に耕作が触れ、耕作に再び生きる希望をもたらした。耕作は拓一と異なる才能を生かし、旭川の活動家とのつながりを得る。そして福子の自由のためにその機会を生かせないかと考えた。一方節子は親からの自立と、

まだ先が明らかではない耕作の勇気を信じて家を出る。福子と節子が一時的にお世話になった沼崎医師は神の備えた人である。なぜなら沼崎医師は福子と節子が一時的に身を寄せる

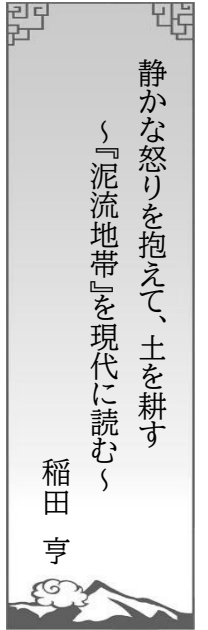
場所を提供しただけでなく、彼の奥様が旭川の活動家と知り合いであったからだ。そして福子は将来の希望を拓一の中に見出し、それを節子は全力で応援するのである。続泥流地帯の最後の20ページで物語は急展開する。それはまるでヨブ記の最終章(42章)でヨブに大きな祝福がもたらされたかのような。酸性土の田は流木除去などの作業で二年、最初の田植えで稲が枯れた後、拓一が足を折り治療を余儀なくされた一年、そして三年経った春によく稲の芽が田んぼに根付いた。これはイエス・キリストが宣教活動を始めて、十字架にお掛かり

になって、復活されるまでの期間とほぼ同じなのだと気が付かされる。稲の芽が根付いたのはイエス・キリストの復活の象徴であろう。そしてその奇跡をはっきりと目の当たりにした拓一、耕作、福子、節子は神の力によって新たな世界に飛び立つのである。節子と福子が旭川に旅立つことの証として車窓から振られた白いハンカチは、私たちの日々の苦難から真に自由にさせられるための三浦綾子さんの愛のメッセージなのである。

愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。ヨハネの第一の手紙 4章 18節

静かな怒りを抱えて、土を耕す  
『泥流地帯』を現代に読む

稲田 亨



十勝岳の泥流が町を呑み込んだその瞬間から、物語は静かに、しかし力強く始まる。家や家族、大切なものを一瞬で失っても、土地を離れず、共に生きることを選んだ人々。その姿に、私はただ感動したというよりも、むしろ「怒り」に近い感情を覚えた。

それは、誰かにぶつけるような激しい怒りではない。もっと深く、沈黙に似た怒りだ。理不尽な現実には押しつぶされそうになりながらも、決して諦めず、誰にも気づかれない場所でただ土を耕し続ける。その姿に宿る「静かな怒り」に、私は心を奪われたのだ。

昭和の終わりに生まれ、A型らしい几帳面さと責任感を自負して育った私は、社会に出るころには「自己責任」の言葉が当たり前のようになり、口にされる時代に生きていた。努力は当然、結果は自己責任、助けを求めるとは甘え——そんな空気にあらがえぬまま、私は社会の中に溶け込んでいった。

この物語に描かれるのは、現代にも通じるその苦しきだ。土地に生きる人々は自分自身の理想や感情よりも、家族や地域社会の期待、過去からのしがらみを優先する。表立って反発することはなく、沈黙のうちに葛藤を抱え、土を耕し、日常を守ろうとする。その姿は、私たちが現代社会で感じている「声を上げられない生きづらさ」と地続きなのだと思う。

それでも物語は、決して絶望だけを描かない。むしろ、希望を手放さずに生きようとする人間の底力が、静かに息づいている。自然に翻弄されながらも、自然と共に歩もうとするまなざし。すべてを失っても、そこに生きる価値を見出そうとする営み。その姿に私はどこか「懐かしさ」にも似た感情を抱いた。

土の匂い、泥の冷たさ、家の暗がり、炊き立てのご飯の湯気——。かつて父方の祖父母と共に暮らした幼い日々や、母方の祖母の家で過ごした夏の記憶が、ふと心に蘇ってきた。自然と共にあった暮らし。手間も不便も当たり前だったけれど、そこには確かな手応えと、人とのつながりがあった。

本作の登場人物たちは、自然の恐ろしきと

豊かさの両方を知り尽くしている。その中で、人はどう生きるべきかを問い直していく。その問いは、便利さやスピードばかりを追い求める現代社会にこそ、強く響くものだ。情報に溺れ、孤独にあえぐ私たちに、「生きる」とは、耕すこと、「信じる」とは、待つことなのだと教えてくれる。

また、物語全体を通して感じたのは三浦綾子という作家の視線の「深さ」だった。登場人物の心の揺らぎ、社会の中での葛藤、それらを丁寧にすくい取りながら、決して断罪せず、静かに寄り添っていく筆致。それは、読者に何かを押し付けるのではなく、そっと背中を押し続けるようなやさしさに満ちていた。

『泥流地帯』は、過去の悲劇を描いただけの物語ではない。現代を生きる私たちが、何を大切にしていくべきかを見つめなおすための「現在形の文学」だ。報われなくても、なお生きる。踏みこじられても、なお信じる。そんな「強さ」を、三浦綾子は物語の中に確かに刻んでいた。

『続 泥流地帯』を読んで思うこと

林 文子

作者の登場人物の口をかりて、言わせている言葉が深い。

「失ったものばかり数え上げてみても、生きる力にならん。自分に残されたものを、数えて感謝しなくちやなあ」(p. 86)

主人公・耕作の恩師・菊川先生は、家族を泥流で失った。私も人生で失ったものを数えてしまふときがある。そんな時、こんなにひどいめにあつた先生でさえ、こんな言葉を語れるのだから、頑張らないといけないと思う。

次に印象に残ったシーンは、耕作とその兄、拓一の会話。

「俺はな、いつも思うんだ。生きてるくせに文句を言うなとな」

「生きてるくせに文句を言うな？」

「うん。あの時死んだ人たちは、みんなそう言うだろうと思うてな。」(p. 111)

生きていれば、嫌な日もあれば良い日もある。しかし、生きていくということは「幸せになれるチャンス」が残されているということ。亡くなってしまうと、生きていく世界で何か物事をなす機会が失われてしまう。拓一は、必死に田んぼを耕し、泥流にあつた土地に稲が生える日を信

じ、努力する。楽に生きれる道があると耕作が言つても耳を貸さない。その苦労を「誰も俺から奪えない宝」(p. 275)とまで言う。生きていくことで、努力が報われる日が来たらどんなに良いだろうか。悲しいことがあつても良い日が来ると信じることは難しいようだなと尊いのだろう。

耕作の母・佐枝はこうも言う。

「苦難に会つた時に、それを災難と思つて歎か、試験だと思つて奮い立つか、その受けとめ方が大事なのではないでしょうか」(p. 504)

明るい拓一や佐枝、その明るさが物事の良い面をみて太陽に照らされた明るい道を歩もうとする。この「明るさ」が人生を歩くヒントかもしれない。人を恨まず、人から金をとろうとせず人をいたわる生き方。そんなもんじやない、と言う声もありそうだが小説は人としての理想を描く。

耕作が生徒を連れて深山峠に遠足に行った時のこと。そこからの眺めの壮大きに耕作は、生徒たちに

「すばらしいだろう。これがお前たちのふるさとだ。よつく心に焼きつけておけ」(p. 402)と言

い、  
「自分たちのふるさとを胸に焼きつけておくということは、人間として大事なことなんだ」(p.

403)

「人間はな、景色でも友だちでも、懐しいものを持つていなければならん。懐しきで一杯のものを持つていけると、人間はそう簡単には墮落しないものなんだ」(p. 404)

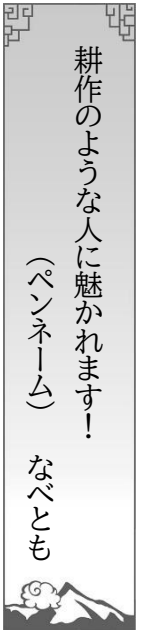
と続けた。

この場面が一番心に残り、大好きなシーンだ。私も何かめんどろだなと思うとき、自分の心が浮き立つ瞬間を思い出すことがある。するとおいしいお菓子を口に含んだごとく元気が出てくる。

自分のふるさと、自分を元気にしてくれる思い出や物事をもつことが生きるコツのようなのだ。

この本をよんで、生きる理想をまざまざと見せられた気がする。耕作のまわりは良い人ばかりだ。悪い人も出てくるが、まさに主人公たちの「試験」として登場する。現れる試験を読者も乗り越えていって欲しい。それはたやすい事ではないけれど、『続・泥流地帯』の本の中はそんな人たちがいる。

作者からのメッセージが詰まった本だった。



耕作のような人に魅かれます！

(ペンネーム) なべとも

一度はあきらめかけた中学への進学を再度目指して首席で合格しますが、大事な家族を慮り断念。その後、教師への道を選び、祖父母と兄弟と共に過ごす日々の中で希望を見出していく耕作に魅かれました。

自分の本心になかなか気づかない。気づいても誰かのために押し殺してしまう我慢強さとやさしさが相成っている耕作。しかしながら、秘めた情熱を持ちながら、地道に成し遂げ、時には突飛な行動に出ることに引き込まれるのです。

本作では、耕作と兄の拓一を中心に1920年頃の当時の厳しい自然での暮らしが書かれています。現代の生活とあまりにかけ離れ、目を覆いたくなるような場面もあります。借金のために人が売買される現実や、長男の嫁として姑に翻弄されることも。その時代を乗り越えた先に火山泥流が発生し、多くの死者が出る中、必死に生き抜く耕作と拓一の本質的な言葉に心が打たれます。

生きるとは辛いことも多いけれど、まずは生き抜く。

その中で多くの出来事にぶつかっても、誰かの強さとやさしさに触れて生き方が変わっていくことがあると感じました。

耕作さん、大きな愛をありがとう。



死を描く

清家 亮太

読み終えた文庫本を閉じた途端、急いでページを繰ってあの記述を探した。小説のクライマックスでもある山津波の場面、そのなかでも、ややもすると読み飛ばされてしまいそうな一文だ。「馬が幾頭も流れていく。倒壊した住宅や丸太とともに、泥に流される馬たちの描写である。この一文にこそ、小説『泥流地帯』の本質を見ることができるとは思えないかと考えている。

この場面より以前に、一頭の馬の臨終が描かれている。耕作の家で大切にされている青の死だ。耕作が毎日心を込めて世話をした青は、彼が誰にも語りきれない辛さ、寂しさを黙って聞いてくれる、心のよりどころでもあった。青の最期には、不注意によって青を死に追いやってしまったことへの自責の念にかられる耕作の姿とともに、紙幅を尽くして言葉が紡ぎ出されている。描かれた丁寧な死である。一方、先述した、押し流されていく馬たちの描写には、たったの十文字しか費やされていない。何ともあつげなく、まるで突き放すかのような冷たさがある。自然の発する力の前に、なすすべもなく流されていく数頭の馬たちの描写から、私たちは大災害の本当の怖さを読み取ら

ねばならないのではないだろうか。作中では、当時の北海道においては、「農家にとって、馬は大事な同労者」であり、「家族の一人のような」存在であったと記されている。当然、泥に飲み込まれ流れてゆく一頭ずつにも青のような名前があり、青にとつての耕作のような、愛情を注いで養ってくれた飼い主のかかわりがあったはずである。しかし、ここで描かれることはない。山から押し寄せる土砂は、馬たちの命だけでなく、そこにあるたくさんの物語まで、一気に奪い去ってしまうのだ。青の死の記述との大きな落差により、流れていく馬たちの一方的な死、有無を言わせぬ暴力的な死という現実が読者の目の前に突きつけられる。

毎日のように接する戦争、災害、大事故を伝えるニュースにおいて、テレビのアナウンサーが読み上げる「死者〇〇名」という言葉には、訪れたことのない国、聞いたことのない名前の町、顔も知らない人たち、老若男女が十把ひとからげにまどめられている。「死者〇〇名」と置きかえられた一人一人には、それぞれの人生があり、ドラマがあったはずにもかかわらず。

『泥流地帯』のモチーフとなった、大正末の十勝岳噴火による融雪型火山泥流による死者・行方不明者は百四十四名であった。しかし、この「百四十四」という無機質な数字に落とし込

まれた人々の人生を、作家・三浦綾子が掬い取る。そして読者の前に市三郎の物語、キワの物語、良子の物語として示してくれる。ちょうど耕作が泥流から福子の手をつかんで引つ張り上げたように、被災者の奪われた名前を取り戻し、突然幕を下ろされた人生を物語へと引き上げる。これがこの小説の本質であり、これこそが「文学の力」ではなからうか。

私の家は大正9年、上富良野島津地区に越中富山から祖父母が入植した家柄にあります。年頃だった祖母が同年、これも石川県より入植した田中家へ縁があり結婚。昔の事ですから、本家の兄弟から、田を分けて貰い3町(3ヘクタール)の面積で独立しました。

大正15年には噴火災害にも遭遇し、祖母の話では、新築間もなくの納屋の2階に米を担ぎ上げ、避難したとのことでした。

日新、草分は137人も死者行方不明者を出す大きな被害を受けました。

大量の流木のほとんどは、上富良野橋でせき止められました。

島津一帯は死者は出なかったものの、本家の裏手に流れる富良野川が決壊して、田は富良野川沿いに流れ込み島津一帯に押し寄せたと語っています。

幸い、我が家の住宅には被害はありませんでしたが、その年は、農地に流れ込んだ水田の土砂の除去に汗し、地区の好意で田を貸して貰い水田を作りましたが、冷害になったとの事で、暮らし振りの大変さは容易に想像出来ます。

我が家に伝わる泥流地帯

田中 正人



当時のわが家の復興は幾ら被害が小さいとは言え、草分地区と違って、土砂の除去はモッコを担ぎ、人を雇い主に人力で、富良野川の辺りに捨て、小高い広場となっていました。

家は住宅と納屋を兼ねた桁ぶき木造建物で、物心がついた小学校一年生の私にとっては大きな建物に感じました。

この頃にはもう祖父が亡くなり、祖母、両親、子供3人の6人が暮らしていました。

子供ころにも、米を担ぎ上げた現場を探索。このあたりに置いたのかなと想像していました。

納屋兼用の住宅の屋根裏は、さながらネズミの運動場。当時もこの様な光景が広がっていたと、思いを馳せます。

泥流被害を受けた田は、高校生になっても、収穫が近づいて来ると稲の葉先が赤くなり変色していました。

収穫した玄米は、駅前の検査場に馬で搬入。検査米は「しらた」と言う輝きの無い米が混入し、米選機と言う野道具で選別していましたが、取り除くのが無理な時代でした。質より量の時代で、5等級でした。(当時)

現在では色彩選別が来て、一等米が簡単に出来るまでの技術に向上しています。

祖母は小さな体で、わが家の屋台骨を支え

てくれました。時には厳しく、そして優しく。

祖母には子供が授からず、噴火災害から13年後、親戚筋を頼って息子を貰い養子縁組をしました。

養子縁組した子は、家に3年にいただけで、昭和16年12月に始まった戦争に駆り出され、旭川第7師団に入隊し、昭和17年8月ガダルカナルで戦死しました。

私の母は大被害のあった日新の出身で65名の死亡、行方不明者が出た所で生まれました。

沢違いの鰻の沢に大正12年に生まれ、当時は3才で鰻の沢も被害にあってはいますが、深い沢の奥地に住んでおり泥流被害は到達していません。

私の父は、祖母の弟に当たり、戦死した息子の後から再び親子関係を結び、養子縁組をして田中家を今に引き継いでいます。

前置きが長くなりましたがこれがわが家に関する三浦綾子とは違う、泥流地帯での出来事となります。

祖母が、弟と養子縁組をして、母がもし、3歳で日新地区で泥流の犠牲となっていたら、私は生まれていなかった事になります。

その様な不思議な縁で、生かされていると感じます。

ですから、三浦綾子さんの泥流地帯と続編は新聞掲載当時、わが家に起きた出来事と重ねあわせ、むきぼる様に読み進めていました。

何処の部分を切り取っても、涙は止まらず祖母の苦勞と重ねあわせて読み進めていました。

私の所属している土の会と言う、任意のグループには、私を含め、泥流災害に遭遇した仲間が8名も所属しておりこの方達もそれぞれに、先祖から言い伝えられているドラマがあると思います。

たまたま、この中の何名かも十勝岳防災施設の工事に行き、減災に繋がる仕事に携わり、先祖の思いに寄り添い、手助け出来た喜びに浸る事が出来ました。

8人の仲間とは常に泥流地帯に関する情報を共有しており、映画化の情報とその経過を一喜一憂しています。

映画化が決まり、更に話題も深まり、仲間内でキャストを決め、吉田貞次郎、石村拓一、耕作、石村佐枝、曾山福子、深城鎌治、深城節子など多くの登場人物を割り付け、「素人が作る泥流地帯」として遊んでいます。実際の映画化となると、その登場人物の多さと、時代経過

の移ろいを表現する事には、大変な労力が必要となると推測致します。

仲間内では防災を含め、映画では、復興は単に稲が穫れたから復興でエンドでしょうが、実りの秋を毎年無事に迎えられる喜びが、私たちにとっての復興と思えるのです。

当時の家族単位の農業から、今では大きな農業経営となり、農業を存続させています。

私の住む島津地域は、超高齢化の地域となり、農業後継者と期待出来る者は数名しかおりません。

日新草分の泥流地帯の行く末も、同じ様な経過をたどっており、いつしか泥流災害も忘れ去られようとしています。

集中豪雨で線状降水帯の予報が出され、土石災害の映像がテレビに映されるたびに、日本全国各地に新たな泥流地帯が出来ると、危惧しています。

そして何時の世も、気持ちの中にも、泥流地帯の精神が息づいている事に知らず知らず気づくのです。

三浦綾子さんが伝えたかった泥流地帯のよ

### 拓一にとっての善果

(ペンネーム)

星野 怜



この本を読んで、私はまず、拓一の正直にまっすぐに力強く生きる姿に驚いた。そして、あのような強くて心の優しい青年に育った背景にあるものが何なのかとても気になった。

きっと、博識な祖父から人間としての生き方を言葉で教わっただけでなく、祖父の日頃の姿を見て自然と身についたのだと思う。そして、拓一が暮らす集落の人たちはみな、子どもも大人も貧しいながらもお互いに協力し合って困難を乗り越えてきた。そんな人々に囲まれていたことも影響しているのかもしれない。

開拓から三十年近く経ち、貧しい暮らしも少しは穏やかになってきた頃に、十勝岳の大噴火による泥流で拓一は弟以外の家族も畑も家屋も一切合切流されて失ってしまふ。皆があきらめる状況でも拓一は復興を目指そうとする。そして暴漢に襲われ片足が不自由になっても、拓一は足を引きずりながら何食わぬ顔で今まで通りの作業に没頭する。

私たちは、起こったできごとを「善因善果」「悪因悪果」と結びつけて考えることがよくある。良い事をすれば、きっといいことがある、と明るい希望を抱く。いやな思いをさせられたり、

迷惑をかけられたりしたとき、きっと罰が当たるわ、と心の中でつぶやいたりする。そして、日頃から非難されるようなことを行っている人が不幸に見舞われると、それ、みたことか、と心のなかで嘲り笑うこともある。

だから、決して悪行など働かず、他人思いの心の優しい拓一が、次から次へと不幸に見舞われるのを周りの人たちは悔しく思い、悲しむ。そして、「どうして」と首を傾げる。一方、拓一とは対照的な、あこぎな深城は泥流災害直後の混乱のなかでも金儲けに成功する。しかし、一見、成功者のように見える深城だが、その娘である節子は非道な生き方をする父親を憎み、苦しんでいる。それは、父の悪行の犠牲になっているのかもしれない。

確かに、拓一の今までの行いを見れば、彼に降りかかる災難は理不尽だ。拓一の周りの人たちは「善因善果」が捻じれているように思う。彼らが見つめているのは過去で、自分たちがかつて実際に目にし、触れた拓一の善行だ。

それに対して、拓一はいつも未来を見つめている。苦しい状況の中でもひたすら未来を見つめ、明るい光がさしている未来を信じているのだと思う。拓一も過去を振り返るが、それは、開拓以来三十年ものあいだ、木を伐り藪を切り開いて畑にしてきた祖父や祖母や父、姉と妹、

みんな亡くなってしまったが、その人たちであり、その人たちの温かい思い出である。そして、拓一は明るい未来を見ているからこそ、過去の苦しみに打ち勝ち、先に進もうとしているのだと思う。

私は、決して拓一の真面目で人にやさしい生き方が報われなかったわけではないと思う。

ずっと好きだった福ちゃんをみんなの力で助けることができ、汽車の窓から振られる白いハンカチこそ、拓一の明るい未来であり、彼に「善因善果」が起こったということではないだろうか。

理不尽な泥に刻まれた、祈りの地平

(ペンネーム) みわ



『泥流地帯』と『続泥流地帯』。そのページをめくるたび、私は北海道の冷たい土と、硫黄の匂い、そして開拓者の汗が染み込んだ厳しさに引き込まれていった。ただの物語ではない。それは人間の「試練」という名の重い問いを、読者一人ひとりの胸に突きつける、巨大な塊のような文学だ。

私がこの二部作から最も強く感じ取ったのは人生における「理不尽」の徹底的な肯定、あるいは受容の姿である。そして、その理不尽な世界で「人は何のために生きるのか」という問いに、魂を削って答えようとする人々の姿だ。

主人公の兄弟、拓一と耕作。彼らの家族は苦労の末に開墾した土地を、十勝岳の大噴火による泥流によって一瞬で奪われる。愛する祖父母や姉妹の命、家、畑、全てが、問答無用で濁流に飲み込まれていく。その描写の凄惨さ、容赦のなさは私に「なぜ、こんなに誠実に生きてきた人々に、このような災厄が降りかかるのか」という、根源的な怒りや悲しみを抱かせずにはいられなかった。

作品の底流には、旧約聖書の「ヨブ記」のテーマが流れているという。ヨブは敬虔で正しい人

物であったにもかかわらず、次々と災難に見舞われる。「なぜ善人に悪が訪れるのか」これは、古今東西、人類が抱き続けてきた問いだろう。

私たちはつい「良い行いをすれば良い報いがあり(善因善果)悪い行いをすれば悪い報いがある(悪因悪果)」という因果応報の図式を人生の設計図に当てはめてしまいがちだ。そう考えることで苦難に意味を見出し、未来に希望をつなこうとする。しかし、泥流が彼らの人生を文字通り押し流したとき、その設計図は無残にも崩れ去る。

泥流の被害を免れた拓一と耕作の前に広がるのは、石と流木が堆積し硫黄分を含んだ、死の気配漂う荒地だ。故郷を捨て、都会へ出ていく者も多い中、兄弟は祖父母と父の魂が宿るこの土地に鋤を入れることを選ぶ。

私が最も心を打たれたのは、この「鋤を入れる」という行為の持つ意味である。

それは単なる農地復興ではない。それは理不尽な出来事に対して「それでも生きる」「それでもこの地を愛する」という、人間の意志の表明だ。彼らは損得を超えたところで、祖父母が切り開いた「命の土地」を守り、次世代へ繋ぐという途方もない重圧を背負ったのだ。

拓一の性格は、ひたすらに愚直で誠実だ。彼は損得勘定を抜きにして、目の前の「やるべき

こと」に全身全霊を傾ける。泥流に埋まった畑の石を取り除き、荒れた土地を耕す作業は、気の遠くなるような重労働だ。

さらに、復興に懸ける兄弟を嘲笑したり、邪魔をしたりする周囲の人々の冷たさ、卑劣さも加わり苦難は倍増する。『続泥流地帯』で描かれる復興を阻む様々な妨害や、親戚や村人たちの心ない仕打ちを読むと「なぜ、助け合うべきときに、人はこんなにも醜くなれるのか」と、人間の業の深さに絶望的な気持ちになる。泥流は去っても人々の心には、ねたみや欲という、また別の「泥」が堆積しているのだ。

しかし、その泥のように濁った人間関係の中でこそ、拓一や耕作、そして彼らを支える純粋な人々、とりわけ清らかな光を放つ福子や節子の魂の輝きが際立つのだ。

拓一が信じるのは「報い」ではない。彼は「これをやれば成功する」という保証を求めている。彼がただ行っているのは、誠実に生きること、そして与えられた現実を耕し続けること、それ自体が目的となっている。

この「無償の誠実さ」こそが三浦文学の核にあるメッセージだと私は感じた。災厄は、悪行の結果として訪れるのではなく、ただ「起こる」。その出来事に対し、人間がどう向き合いどう立ち上がるのか、その姿勢こそが試されているの

だと。

祖父・市三郎が遺した言葉は、私の胸にも深く刺さる。

「なりたいたいと思った者になれたら、それが成功者だ」

この言葉は、外的な成功や富ではなく、内面的な充足、すなわち「人間としてどうありたいか」という志を達成することこそが、人生の価値基準であることを示している。泥流によって全てを失っても、彼らが「人間としての誇り」を失わなかったのは、この教えが彼らの魂に深く根付いていたからだろう。

小説の舞台、上富良野の地を想像する。噴火から約100年後の現在、その地には美しい田園風景が広がっている。これは、拓一や耕作のような名もなき開拓者たちの「諦めない愚直さ」と、彼らを支えた人々の「祈り」の結晶に他ならない。

彼らが鍬を入れ、一つ一つ石を取り除いたその一歩一歩が、現在の豊かさにつながっている。小説は過去の悲劇を描きながらも、読者である私に、未来への責任を感じさせた。私たちが享受している平和や豊かさは、過去の凄惨な試練を乗り越えた人々の「執念」によって築かれたものだという、重い事実だ。

泥流は物理的な被害だけでなく、人々の心

にも深い傷を残し、憎しみや不信、そして差別さえ生んだ。しかし、それでも彼らは、互いに手を差し伸べ、赦し、共に生きていく道を選んだ。この物語は、人間の弱さと人間の強さの両方を、極限まで描いている。

特に、耕作が恋心を抱く女性たちの存在は、希望の光だ。福子や節子の揺るがない信仰心、芯の強さは、硫黄と泥にまみれた兄弟の心を、清らかな水のように潤していく。人生の試練は、必ずしも孤独ではない。苦しい時こそ、真の愛情や友情、そして信じる心が、人間を支えるのだという、三浦文学の温かさも感じ取ることができた。

この小説を読み終えて、私は自分の日常に引き寄せて考えた。私たちの人生にも、予測不能な「泥流」は突然襲いかかる。それは病気かもしれないし、仕事での大きな挫折かもしれないし、大切な人の死かもしれない。

そんなとき、私たちはつい「なぜ自分だけが」  
「どうしてこんな目にと」、原因や理由を探し、誰かを恨みたくなる。それは自然な感情だ。

しかし拓一たちの生き様は、私にこう語りかけてくる。

「災難には、必ずしも意味や理由はないかもしれない。だが、その災難にどう立ち向かうか、立ち上がって何を成すか、それこそがお前の人

生の意味になる」と。

人生は、因果応報という単純なルールで動いていない。しかし、報いがないと分かっているにも、誠実さという鍬を手放さずに、自分の土地を耕し続けること。その日々の営みこそが、人間を人間たらしめる、最も尊い行為なのだ。

『泥流地帯』はただの災害文学ではない。それは「いかに生きるべきか」という問いに対する開拓者たちの魂を削った答えであり、祈りの書である。彼らが耕した土地は、まさしく「祈りの地平」だ。

読者として私は、彼らのように、理不尽な運命を受け入れた上でなお、自分の人生という「荒地」に、一つ一つ誠実な「鍬」を入れ続けたい。その先に、ささやかでも清らかな「美田」が開けることを信じて。

「泥流地帯」と三浦綾子さんへ

松野 富子



あれは忘れもしない……今から五年前の、二〇二〇年五月のこと。上富良野町が主催した第一回『泥流地帯』の作文募集を、新聞で偶然に見て私は直感で「絶対、応募する」と決めていた。

小説の舞台が上富良野であること、さらに著者が三浦綾子さんと知って気持ちが高揚した。学生時代に三浦文学と言われていた作品の中で私が読んだのは「氷点」や「塩狩峠」、「石ころのうた」であるが、どの作品も共通していたのは、キリスト者でもあった三浦綾子さんの「いかに生きるか」という思いが伝わり深く感動したことを記憶している。

小説『泥流地帯』は、一九七七年（昭和52年）三浦さんが55才の時に出版の作品である。当時、私は21才。高校卒業後、実家の農業（水田）を父母と共に手伝っていた。そのため小説を読む機会が、すれ違ったようだ。

それが五年前——上富良野町の作文募集で『泥流地帯』が対象作品と分かり「運命」を感じながら早速、物語を読んだ。

時代は開拓期の北海道上富良野村。

主人公の石村拓一と耕作の兄弟は、小作農

家に生まれ土地を持つことが出来ず、小作を続けている祖父母ら（市三郎・キワ・姉・富、妹……良子）と六人で貧しいながらも誠実に暮らしている。父（義平）は、幼い頃に冬山造材の事故で亡くなり、母（佐枝）は、手に職をつけるために離れて生活している。

小作農家の暮らしは苦しく、努力をしても楽にならない……そうした状況のなかで兄の拓一は借金のために深雪楼に身売りをした「福子」への愛を胸に秘めて、農民としても逞しく成長していく。やがて耕作も小学校教師となる。物語を読みながら、映画のスクリーンを見ているように場面が目の前に、広がる——三浦綾子さんの作品が好きなので想像力も働くのかもしれない。

小説『泥流地帯』は、三浦文学の中でも代表作で大正十五年、五月二十四日に起きた「十勝岳大爆発」の史実を元に誕生している。

私が、それを知ったのは、図書館から借りた三浦綾子さんに関する何冊かの参考資料であった。興味深いのが小説が誕生する「きっかけ」は、意外にも夫の光世氏による言葉であったらしい。

「まじめに生きている人たちが、なぜ過酷な試練を受けなければいけないか」というテーマで十勝岳大爆発を題材に小説を書くことを勧め

められたようである。さらに参考資料の中に『泥流地帯』を回顧して——三浦さんは、十勝岳山麓を襲った泥流の惨事を小説化するとは、もつとむずかしいことであった。殊に農村地帯の日々を描くことは農を知らぬ私にとつて、絶壁をよじ登るような困難な業であった。

この文章を読んだ時に、私は三浦さんが作品を執筆するまでに、どんなに不安な気持ちと戦ったのだろうか……と想像をした。

結果的には、執筆をすることにしたようで、「ともあれ、北海道新聞の日曜版に小説『泥流地帯』を書くことに決めた私は、出来得る限りの取材をしようと思った。何をどう始めてよいかわからぬ悲惨な事実には、目を覆ってはいられない……」この三浦綾子さんの言葉に「覚悟を強く感じた。

一九七五年、取材は直ぐに始められて被災地であった上富良野へ何度も足を運んだ。

大正十五年の十勝岳の大爆発から四十九年も経っているが、家族を失った体験者や山津波を目撃した人など、三浦さんは被災地域には幾度も立って、当時を偲びつつノートを取ったらしい。農家の生活に少しでも触れるため、ある時は農家の鶏小屋を金網越しに見て、鶏が片足で立ち、首をかしげる仕草などを、かなりの時間凝視していることもあった。と、夫の光

世氏が取材秘話を語っており、三浦さんの涙ぐましい努力に胸を打たれた。

こうして大変な苦労が実を結び、遂に三浦綾子さんの小説『泥流地帯』は完成した。

この二年後、さらに『続泥流地帯』が出版。大災害に生き残った人々が再生に向けて立ち上がる姿を描く。私が驚いたのは登場人物に実名の方がいたことである。

その人は、吉田貞次郎村長で全篇の「泥流地帯」にも出てくる場面があるが、災害当時、上富良野の村長で、村民の人々からの人望を集めていた。

吉田村長は、泥流によって大被害を受けた田畑を復興させるため、日夜奮闘するが、反対派による中傷、迫害を受け、しまいには、

「泥棒村長」

「泥棒村長」

と、事あるごとに言われ、時には自宅に投石もされた。それでも冷静に対応し、復興のために心血を注いだ人物である。

吉田貞次郎村長の尽力によって上富良野には本道で最初の「耕地整理組合」が設立され、復興が遂に成功したのである。

小説『続泥流地帯』の終わり近くで耕作が聖書のヨブ記の言葉を引用して、

〈神より福祉を受くるなれば、災禍をも亦受け

ざるを得んや〉

泥流に会い、家族も、家も田畑も一挙に失い、その上、拓一が足を怪我した。

「苦難に会った時に、それを災難と思って歎くか、試練だと思って奮い立つか、その受けとめ方が大事なのではないでしょうか」

佐枝(母)の言葉は、三浦綾子さんが私たちへ伝えたかったメッセージではなかったかと思っ  
ている。あらためてこの作品に出会えたことに深く感謝をしたい。

## 訪問

(ペンネーム) ニモ



「なしてそんな落ち込んでるんだべ」

七月の休み時間の校庭はきらめいている。生徒たちは地面に濃い影を落としながら夏の陽ざしの中を元氣いっぱい遊び、どこからもある歓声が重なり合って校舎に反響している。

その校庭の隅のほうで膝を抱え、鼓膜にじんじんと歓声を響かせながらぼんやり座っていた松坂愛之助は、背中を叩かれてゆっくり顔をあげた。

土野精吉だった。いつ隣に来たのか、心配そうな顔で愛之助の顔を覗き込んでいる。

精吉は愛之助の隣に座ると、にこっと笑って「ん？」と問いかけた。精吉は、五月の遠足で愛之助と同じ班になってから、休み時間もよく一緒に遊ぶようになった同級生だ。

「落ち込んでなんか、」

ない、と言おうとして愛之助は口をつぐんだ。誰にもこんな心の中は話せないと思っていたけれど、精吉には聞いてほしいような気がしてきた。昨日、豆腐屋の主人の話を物陰で聞いてから、ずっと掻き乱されていた心のうちを。

愛之助は精吉の着物の袖をつかむと、  
「聞いてくれ、精吉。おれ先生に嫌われてるかも

しれん。嫌われてるどころか、憎いって、思われてるかも……」

そう話しながら愛之助は自分の言葉に耐えられずにぼろぼろと涙を落とした。精吉がぎよつとして周りをきよろきよろと見渡し、慌てて愛之助の肩をさする。遊びに夢中な子どもたちは、誰一人愛之助の様子に気づかない。

精吉は声をひそめた。

「なんで先生がおまえんこと嫌いになるんだ？ そんな様子なんにもなかったぞ」

「違うんだ、じつは、昨日さ……」

愛之助はぼたぼたと涙をこぼしながら話し始めた。

昨日の夕方、豆腐屋食堂の近くの角を曲がろうとしたとき、表で話す豆腐屋の主人の大きな話し声が聞こえた。それはいつものことだったのだが、「耕作先生」という言葉が耳に入ってしまった。

『耕作先生もありや怒ってるよ。拓ちゃんは、足があれだろ、変形治癒だだよ。どうやって田んぼするのかね。え？ ひどいことだよ。気に入らないからって、人様の体を生まれもつかん体にするとはな。拓ちゃんも耕作先生も、やり返さるんって言ってるが……』

豆腐屋の主人は怒っていて、常連のお客さんと話し込んでいるうちに声が大きくなったのだ

ろう。その先もずっと何か言っていたが、愛之助は衝撃を受けてそれ以上耳に入ってこなかった。

愛之助の父親である松坂が、六月に石村先生の兄である石村拓一に怪我を負わせたことは知っている。松坂一人がやったことではないが、彼こそが暴行事件の主謀者である。その夜、真っ青になって帰ってきた父親が、驚く母親に玄関先でまくしたてた事実を聞いて、愛之助は全身の血の気が引いていった。なんと謝ろう、どうすれば許してもらえらうと、胃がひっくり返って口から出そうな気持ち悪さを感じながら登校した翌朝、『先生は何とも思っていないぞ。今までどおり仲よくやろうな』と言葉をかけてもらい、心の底から救われたのだ。

それなのに。

「やっぱり先生怒ってるんだよ」

精吉は愛之助に何と声をかけていいかわからなかった。先生が大ごとになかったので、暴行事件の真相は村に大きくは広まってはいない。だが、石村拓一が突然負った怪我が本人のせいではないことを、知っている者は知っている。

「うーん……豆腐屋さんが勝手に言っただけだろう」

「いや、豆腐屋さんと先生は仲よしなんだ。先生は、豆腐屋さんには本当の気持ちを言っただ

のかもしれない」

「……愛之助だつて先生と仲よしだよ。先生がおれたちにうその態度をとるとは思わん」

精吉は前を向いて校庭を眺めた。強い陽ざしのなか、石村先生は、精吉たちと対角線側の校庭の隅で同級生たちと何か話している。生き生きとした背中を見ていても、何か怒りのような感情を隠して生徒たちと接しているような人にはとても思えない。

愛之助は涙を何度も洋服の袖で拭った。もうすぐ休み時間が終わる。

「先生のお兄さん、そんな大変なことになってるって知らなかったんだ、おれ」

愛之助はその点でもショックを受けていた。遠足のとき、通りかかった先生の家のそばには田んぼがあった。遠足のあとで先生が話してくれた。あの田んぼは、十勝岳爆発の時に、泥流とともに大きな木がたくさん流れ込んできた場所だったという。

『そうは見えなかっただろ?』

石村先生は笑っていた。

『先生は兄貴に、田んぼを元に戻そうとするのはやめようと何度も言ったんだ。この先生が、もう無理だつて人に言ったんだぞ。それほどすごかったんだ』

そう言つて先生は、遠くを見つめていた。教

室の壁の向こうのずっと向こうにある、田んぼを見つめようとしていたのだろうか。それともさらにその向こうにある十勝岳を見つめていたのだろうか。

愛之助は胸がどきどきするような気持ちでその話を聞いた。いつも笑つて生徒たちを元気づけてくれる石村先生が、苦しげな表情で誰かに何かを諦めてほしいと懇願する様子をどうしても想像できなかったのだ。

先生のお兄さんの田んぼは、たしかに見たはずなのにあまり愛之助の印象に残っていない。

泥田、と先生は言つていたように思うが、あまり印象に残っていないということは、もうすでに普通の田んぼの状態に近かつたのだろう。先生のお兄さんが、諦めようと言われ続けても元の田んぼに戻すことを諦めなかつたからだ。

もしもお兄さんがこれから田んぼの仕事ができないようになってしまったら……。

「お兄さん、許せないよな。うちの父ちゃんのこと。先生だつて許せないよきつと。おれのことだつて……」

愛之助が膝を抱えて見つめる先で、石村先生は生徒からぐるぐる逃げ回り、大きな口を開けて笑っている。

同じように石村先生を見つめながら、精吉はいくら考えても愛之助が言うように、先生が

愛之助を許せないでいるとは思えなかつた。

遠足のとき、精吉がこそこそと隠すようにして食べていた昼飯の薯を、握り飯と交換してくれた。みんなの前で薯をうまいと言いつつ切つてくれた。貧しい農家に生まれたことで、時々精吉の胸の奥底に起きていた小さな地震のようなものが、あの日に止まつたように感じた。ぐらつかなくてもいいと思える安心感をくれた先生の温かさは、どんなことがあつても簡単に人を憎んだりしないような気がした。

「……大丈夫だべ」

精吉が愛之助の背中を叩くと、愛之助の瞳に残つていた涙がぼろりと落ちた。

その晩、愛之助は夕食後に自宅と続いている店へ降りた父親の背中に、思い切つて話しかけた。

「父ちゃん、聞きたいことがあるんだけど」

店の帳簿を確認していた愛之助の父は、振り向かずに向うんと唸つた。愛之助は構わず続ける。

「石村先生のお兄さん、足がちゃんと治らないかもしれないって、父ちゃんは知ってた?」

ぴくりと父の頭が持ち上がった。返事を待たが、父は何も言わなかつた。明らかにこちらに意識が向いているのに無視をされて、愛之助

は奇々した。そんな態度をとられたら返事を聞かなくてもわかる。愛之助の声は自然と荒くなった。

「父ちゃん知ってて平気なの。謝ったの、石村先生のお兄さんに。謝ったって足、治らんかもしれないのに」

「うるさいー！」

愛之助の父は大きな声を出して振り返った。

その目には怒りのほかに動揺の色も浮かんでい

る。「謝ったに決まってるだろう、とつくに話は済んでんだ。いまさら何言い出すんだ、おれは治療費出してんだぞ全部！」

愛之助の父、松坂は負け続けた。村民全体のためを思って吉田村長を瀆職背任の罪で告訴し、吉田村長におもねって生徒に講釈をたれるような息子の担任に痛い目を見せようとしただけなのに、検事には不起訴とされ、担任ではなくその兄に大怪我を負わせてしまった。気持悪いのは両者とも自分たちを訴えないと言っていることだった。しかし松坂はそれを鵜呑みにはできなかつた。特に担任の兄に対して、いつ裁判を起こされるかびくびくしているのだ。足の怪我が変形治癒とわかった今、もし自分であれば必ず訴える場面だからだ。

そんな父親の心情まではわかるはずもない

愛之助は、父親が声をあげたことに対してひるむどころかいつそう腹を立てた。

「謝ったってそれ、最初だけじゃないの。もっと、どうしたらいいか、一緒に考えていかなきゃいけないんじゃないの。治療費なんて、当たり前だよ払うのーお兄さん足治らなくて、これからどうやって生活していくのー！」

「うるさいぞー声が大きいんだよー！」

愛之助の妹が向こうの部屋で泣き出すのが聞こえた。

父が明らかにこの話題を切りたそうにして、怒鳴りながら目を合わせようとしない様子に愛之助は呆れ、怒り、涙が出そうになった。

(おれは絶対に父ちゃんみたいになりたくない)

愛之助は唇を噛み、足を踏みしめながら自室へと戻った。

「父ちゃんに怒鳴ったの？」

次の朝、授業が始まる前のざわめく教室で松坂家の昨晚の話を聞いた精吉は、愛之助をまじまじ見つめた。

「それで、その荷物は何だ？」

愛之助が机に置いた大きな染め抜きの風呂敷包みを精吉がおそるおそる指さすと、愛之助は真剣な顔つきで精吉の腕を握りしめた。

「精吉、たのむ、おれを精吉の家に置いてくれ。」

おれ自分の家に帰りたくない」

「ええっ!」

困惑する精吉のもう片方の腕も掴み、愛之助は必死に訴える。

「父ちゃんとはもう縁を切るんだ。あんな開き直り父ちゃんと同じ家にいたんでは、先生に申し訳が立たないよ。それで精吉、先生のお兄さんを、何とかして手助けできないか、これからおれと一緒に考えてほしいんだ」

その切羽詰まったような声を聞いて、精吉は愛之助の荷物に目をやった。ぼくことお世辞にもきれいと言えない包み方の風呂敷包みは昨日の夜、愛之助が父の庇護下にあることが我慢ならず怒りに任せてまとめた衣服や勉強道具などだった。愛之助の手を腕から下ろして、精吉はひと呼吸おいて答えた。

「愛之助、すまんけど無理だ。うちにはよその人間を食わせる余裕はない」

「あつ、お金ならあるんだ!貯めていた小遣いやお年玉、全部持ってきたからさ!おまえの母ちゃんに全部渡すよ」

風呂敷からいそいそと金入れを取り出そうとする愛之助の手を制止して、精吉は首を横に振って申し訳なきように愛之助を見た。

「すまん、もっと正直に言うつと、質屋の子が泊まりに来たりしたら家族みんながびくびくするん

だ。どうしたらいいかわかんなくなる。おまえにはうちの当たり前が全部きつく感じるだろうし」

「そんな……」

精吉はちよつと笑って、愛之助の肩を叩いた。「家出なんかしなくても愛之助、おれにいい考えあるから、あとで教えてやるよ」

その時授業開始の鐘が鳴り始めた。

愛之助はあわてて廊下に飛び出すと、帽子掛けに風呂敷包みを掛けてから教室に駆け戻った。鐘が鳴り終わる寸前に席について顔を上げたとき、教室に入ってきた石村先生と目が合って、愛之助は自分の胸が現金にも晴れていくのを感じた。

「だから何度も言ってるべ。先生は愛之助のこと嫌ったりしないよ」

石村先生に笑いかけてもらったとうれしそうに告げられた精吉は、盛大なため息をついた。

愛之助は朝までの勢いはどこへ消えたのか、借りてきた猫のようなおとなしきでうなずいた。少なくとも嫌われてはいないと思えた今朝の石村先生の表情を思い出して、口元が笑ってしまふのを何とかこまかそうと咳払いをする。

「それで精吉、いい考えがあると言ってたけど

……」

「そうだ。愛之助、おまえが自分で行けばいいんだ、先生の兄ちゃんのこと」

「へっ？」

愛之助の口から素っ頓狂な音が出たが、精吉は腕組みして自信満々の表情だ。

愛之助の父親はこの問題について取り合う気がなく、石村先生の兄のことを気にかけているのは愛之助で、愛之助自身はまだ石村先生の兄と会ったことがない。昨日から話を聞いていて、愛之助が実際に見舞いに行つて気持ちを伝えたり、一緒に考えるのが一番いい、というか、それしかないだろうと精吉は思った。

「おまえが行つて父ちゃんの分も謝れ。それで、自分は怪我させた関係のある人間としても、石村先生の生徒としても、先生の兄ちゃんの助けになりたいつてこと、一生懸命伝えれ。な？それが

言えんかったとしても、お見舞いに行くくらいしたつていいべ、いっぺんくらいな」

愛之助はぼかんと精吉を見つめた。そう言われればそれが一番いい気がする。自分が先生の兄を見舞うことはまったく変ではない。父も当初は見舞いに行つていたのだ。ただなんとなく、愛之助はこのことについて自分が一線引いた向こう側にいると思つていた。当事者である

のは父で、自分ではないからだ。しかし実際は、線の外側から父を責めるのも、先生の兄のこれからを心配するのも、なんだか腑に落ちないような、もどかしいような気持ちを感じていた。

石村先生に憎まれるかもしれないことは怖いのに、自分自身が直接関わることはできないからと、勝手に父を責めるだけ責めていた。もちろん父は責められるだけのことをしていてと思つているが、その父と縁を切るようなことをしなくても、誠意を見せることはたしかにできるかもしれない。

「その通りだ！精吉……」

愛之助は俄然その気になったが、自分のことを知らない先生のお兄さんを訪ねる様子を想像したとき、その意気は空気の抜けていく風船のようにしぼんでいった。

「……精吉、一緒に行つてくれる」

蚊の鳴くような声で呟くと、精吉は笑顔で愛之助の背中を叩いた。

「なあに言つてんだべ、おまえ一人で行かなきゃ意味ないよ。でも……」

精吉は愛之助の顔を覗き込んだ。

「ちよつとだけ、行きやすくなるかもしれないぞ。愛之助がこのクラスの代表も背負ってくれたらな」

そう言うと、精吉は教室を振り向いて「おー

い！」と声をあげた。休み時間だが教室に残っていた者たちの顔がいつせいにこちらを向く。

「なあ、足を怪我した石村先生の兄ちゃんのところにも、愛之助がお見舞いに行くんだ。おれたちからも、なにかお見舞いあげたいんだけど、みんな手伝ってくれるかなあ」

はつらつとした声で話す精吉を愛之助はびつくりして見つめていた。精吉とは遠足以来仲が深まったが、こんなに明るい表情で同級生たちに呼びかける様子は今まで見たことがなかった。どちらかというとな愛之助のほうがそういったことを得意とする方だった。

「お見舞い？」

「なにになに？」

「おれも行きたくないなあ」

どやどやとみんなが集まってくる。みんな石村先生が大好きなので、目が輝いている。

「すまんけど、これは事情があつて愛之助ひとりで行かせてやってほしい。おれたちは気持ちがあつたお見舞いを贈る、それを愛之助に代表して届けてもらうんだ」

精吉が腕組みをしてきっぱりと言った。愛之助は目を瞬かせて精吉を尊敬のまなざしで見つめた。何人かは愛之助を見て、なんとなく察したような表情でうなずく。

「お見舞い、何がいいかなあ」

「鶴がいいよ、お見舞いには千羽鶴だよ」

「いやあ、相場が決まってるもんをもらつてもなあ」

「学級新聞は？おもしろい記事を書いてき。病院って退屈だべ？」

「名案だ。でも時間がかかりそうだな」

「足怪我したんだから松葉杖つてのは、どう？」

「そういうのは素人がつくるもんでないよ」

みんなが思い思いに話す様子を愛之助は感慨深く見つめていた。クラスのもんも当然のように先生のお兄さんのことが心配だと思つている。そのことがうれしかった。

「そういうえば、先生よくおれたちの綴り方や図画を家に持って帰つて、兄ちゃんに見せてるつて言つてたよなあ」

同級生の一人が思い出したように呟くと、周りがいつせいに湧いた。

「言つてた言つてた！」

「兄ちゃん喜ぶんだろ」

「照れくさいけどうれしいよなあ」

そうだと、愛之助も思い出した。先生のお兄さんが優しい人に違いないという確信が胸にあつたのはなぜだったのか、先生がうれしそうにその話をしていたからなのだ。

『先生の兄貴は、先生より好きかもしれないぞ、おまえたちのかいたものを見るのが』

精吉がぼんと膝を打った。  
「だったら絵を描こう、みんなで！」

放課後、愛之助は花井菓子店に寄り、栗饅頭を一箱買った。店員さんは箱をきれいに包装したあと、愛之助の風呂敷包の中に、荷物を広げずに取り出せるように入れてくれ、風呂敷をきちんと結び直してくれた。

そして今、愛之助は石村先生の兄の病室の前に立っている。手汗で湿った風呂敷包みを胸に抱きしめると、愛之助は目の前のドアに向かって拳を突き出した。心臓が喉元までせりあがつてきたのかと思うほど大きく波打っている。病室のドアの色はなんだかひやりとしていて、愛之助に叩かれるのを拒んでいるように思えた。不意になにもかも放り出してすつ飛んで帰りたいような衝動にかられる。先生のお兄さんはきつと優しい人だが、突然弟の教え子が訪ねてくることをどう思うだろう。足の怪我の具合によつては迷惑かもしれないのだ。

(でも、おれは、謝りにきたんだから。それをしないと、何も始められないんだから)

ふうーっと長い息をつくると、愛之助は一生分の勇気を振り絞つてドアをコツコツと叩いた。そのあまりにも弱々しい音に焦つてもう一度叩

こうとしたとき、

「どうぞ」

と扉の向こうからはつきりと、よく通る大人の声があった。

愛之助がそろそろと病室に入り、目を上げると、ベッドには大きな男の人がいた。

カーテンは開けられていて、窓から西陽が斜めにベッドや床に差し込んでいる。白いリネンや白い壁がすべて夕陽の色に変わっていた。

男の人は体を半分起こして座り、愛之助のほうに顔を向けている。その顔は、目や鼻などの部分だけを見ると違うのに、全体の雰囲気から石村先生にそっくりで、愛之助は驚くと同時に自分の体の緊張が一気にゆるむのを感じた。お兄さんより先生のほうが少しハンサムだが、お兄さんのほうが先生より優しい目をしていました。

先生の兄は一瞬目を見開いたあと、すぐに優しい笑顔になった。

「こんにちは」

優しく、しかし淀みない声がまっすぐ愛之助に向かつて放たれ、愛之助はハツとして背筋を伸ばした。

「こ、こんにちは。おれ、あの……松坂愛之助と申します」

名前を言う時、愛之助は真っ赤になった。

「松坂……」

先生の兄は少し首を傾げたあと、「ああー」と声をあげた。

「耕作のクラスの子だね！こんにちは！わざわざ来てくれたのかあ」

なんの屈託もなく顔を崩して笑い、先生の兄は愛之助に向かって右手を伸ばした。握手をしようとしてくれていると気づき、愛之助は慌てて床に敷いてあるゴザに荷物を置くと、近くまで寄った。お兄さんの手はがっしりとしていて、あたたかかった。

愛之助は自分が何のためにここまで来たのか忘れかけてしまった。それほど、足を怪我していることも、自分の父親のたくらみによって暴行を受けたことも、先生の兄から感じ取ることができなかった。

「学校からの帰りかい？愛之助くんの家はこの近くかな？」

にこにこそう聞かれて、ハツとした愛之助はあわててベッドから離れると、風呂敷包みからお菓子の箱と、巻いた画用紙を取り出して手に握った。息を吐くと、再びベッドまで近づく。

「あの、先生のお兄さん」

「拓一でいいよ、てへんに石で、拓、一番の拓一というんだ」

「た、拓一さん」

愛之助は箱と画用紙を差し出した。

「これ、お見舞いです。クラスのみんなも、拓一さんに早くよくなってほしいって、思っています。それから、本当にごめんなさい！」

愛之助は最後叫ぶように言うのをぐんぐんと下げた。

「父がやったこと、本当にごめんなさい！拓一さんの足、ちゃんと治らないかもしれないって聞いて、本当に、おれ、謝らなくちゃって思ってた……だって、あの、仕事とか、これから……」

拓一は驚いて、愛之助の下げられた頭を見つめていた。愛之助の声はだんだん涙混じりになり、尻すぼみになっていった。

拓一は差し出された箱と、画用紙をひとつずつ受け取ると膝の上に乗せ、愛之助の肩を優しく叩いた。

「愛之助くん、ありがとう。お見舞いに来てくれてうれしいよ」

拓一は先ほどと変わらず、優しくもはっきりと通る声で言った。

「これ見てもいいかい？」

愛之助が顔を上げると、拓一は丸めた画用紙を手にとっていた。愛之助がうなずくと、うれしそうにとめてあった紐をほどいてくるくると広げていく。

「……！」

画用紙に描かれていたのは、大きな田んぼだった。端のほうに家もあり、男性が二人と、その間に女性が一人立っていて、みんな笑っている。石村家であることは一目瞭然だった。

お見舞いに絵を描こうと決めたとき、これしかないというのがクラスみんなの考えだった。全員が先生の家を見ているのだ。先生のお母さんも見ている。お兄さんだけは見たことがないので想像で描いた。なので、あまり似ていない。石村先生をそのまま縦に伸ばしただけのような姿をしている。しかし拓一が息を飲んだのは、そこではなかった。

「……豊作だね」

田んぼには一面、黄色い絵の具で金色の稲穂が描かれていた。実っている様子を表現するために、斜めに筆を入れていく。精吉を含めて農家の子が何人かいたので、市街の子たちは監修を受けながら色を塗ったのだ。

「あ、あちこちの方向から塗ってるから、塗り方がちよつと変かもしれないけど」

愛之助は照れて言い訳を口にした。拓一が画用紙を広げたとたん、目にぱつと光が入ったのを、愛之助はたしかに見た。

「……みんなで描いてくれたの？」

拓一がきらきら光る目で愛之助に聞くと、

愛之助は赤くなつてうなずいた。

「おれがお見舞いに行くことを言ったら、みんなもお見舞いを渡したいと言ってくれたんだ。それで、農家の子たちに田んぼの描き方を聞いて、みんなで筆を出してきて描いたんだ。拓一さん、おれたちの絵を見るのが好きだって、前に先生が言ってたから……」

「そうかあ」

拓一は感慨深そうな声を出してまた絵に目を戻した。愛之助が黙って拓一の顔を見つめていると、拓一の目のきらきらした光が、大きく変わったかと思うと盛り上がり、まぶたのふちから涙がこぼれた。

(えっ、顔は笑ったまま泣くなんて)

愛之助がぎよつとして、おろおろと目線をあちこちに向けていると、拓一は画用紙を布団の上に置き、頬をぬぐって言った。

「愛之助くん、おれが今どんなにうれしい気持ちか、きみに話してもいいかい？」

「愛之助くんたちが描いてくれたこの絵を見たときにね、おれは自分が信じているものを、きみたちが一緒に信じてくれてる気がしたよ。おれの心がこの絵を見てどんなふうに動いたか、うまく伝えられないのがもどかしいよ。この絵、

この部屋に貼っていい？耕作に見つかるとはいやだ？どうして？……わかった、聞かないでおくけど、これはおれの宝物にするからね。

きみも知っているとと思うけど、おれたちはあの泥流に奪われた土地を元に戻したいんだ。だけど、あの惨状を知っている人たちの中には、それは難しいと考える人たちもいるんだよ。きみのお父さんもそうだったんだ。いや責めていくわけではないんだよ、だって、あんなことが起きたあとなんだ、いろんな考え方があって当たり前だろう？きみも、友達いつも同じ考えを持っていくわけではないだろう？どっちが正しいとか間違っているとかではないんだよ。でも、おれは復興したい。必ずあの土地は元に戻ると信じているから、復興の道を進みたいんだ。だから、怪我したときは本当に、へまをしたなあと思つたよ。え？なぜ殴り返さなかったって？いやそんなことは、考えもつかなかったなあ。きみだったら、きみのお父さんを一発殴ってるって？そうか、ありがとう、おれのためにそう言ってくれて。でも、怪我のことできみのお父さんや、ましてやきみに何か嫌な気持ちを持つてはいないんだよ。おれがへましただけ。それだけなんだよ。

そうそう、変形治癒って言ってね。きみは、ちゃんと治らないかもって言ったけど、ちゃんと

治るんだよ。足を引いて歩くかもしれないってだけだ。あれ？どうしたの、泣かないでくれよ。足を引いても田んぼの仕事はできるんだ、だから大丈夫。きみは、お父さんに腹を立ててるんだね。でもおれだって、きみのお父さんの気持ちに深くわからなくて、申し訳ないと思うことがあるよ。人より楽観的なほうだからね、耕作ともよくぶつかつたんだよ。え？それも耕作に聞いた？あいつ、なんでも話すんだなあ。

でも、愛之助くん、おれはこの怪我を遠回りだなんて思うのはもったいないと思うんだ。おれはね、愛之助くん、おれの信じている未来をもっと手放したくないと思うようになったよ。きみのお父さんや耕作みたいに、不安に思う人がいるけど、そういう人たちだってすっかり安心してしまうような未来にしたい。それが来ると、おれは信じているんだよ。だからこれから先何が起きても、なにひとつ諦めたくないんだ。他の人がどう言おうと、おれは絶対にあの田んぼをよみがえらせる。それだけは譲れないんだ。だから正直、殴り返すことを考えている頭の余裕はないんだよ」

愛之助は拓一の目から視線を逸らすことができないまま、ベッドの脇にじっと立っていた。石村先生とはまた違う芯の強さを目の当たり

にして、愛之助は打ちのめされたような気持ちになっていた。

「ごめんね、大人が強い言葉で話してしまったな。今言ったことは、聞き流してくれていいからね。きみにも立場があるし、きみはきみなりに自分の考えを持ってくれたらいいんだよ」

愛之助は首を横に振ったあと、うなずいた。

「……それが、おれにできることですか？おれ、拓一さんに、なにか手助けできることがないか、考えたかったんだけど……」

愛之助が呟くように言うと、拓一はまた目をきらきら光らせて頷いた。

「そうだよ、愛之助くん。その通りだ。自分の考えをきみなりに持ってね。おれはもう大丈夫だよ。きみたちがくれたこの絵、おれの宝物になって、おれの足を動かす力になるよ。きつとだ。今日きみが、勇気を出してここへ来てくれたから……」

拓一はもう一度絵を見つめ、にっこり笑った。病室はどんどんかげっていくが、拓一も愛之助もそれに気づかない。愛之助の胸は、拓一の言葉や表情を見聞きして熱く燃えるようだった。

精吉に相談できたこと、みんなで絵を描けたこと、勇気を出して病室のドアを叩けたことが、熱く渦巻いて、涙がこぼれそうだった。

「これ、何かなあ、花井菓子店の包装紙だ」

拓一は先ほどまでの真剣な瞳がうそのように、少年のような顔つきで箱を手に持って振っている。

「栗饅頭です……おれの好物」

愛之助が少し照れたように言うと、拓一は顔を輝かせた。

「愛之助くんの好物？うれしいなあ、おれも栗饅頭好きだよ、めったに食べないけどね。一緒に食べようか、それともいくつか持って帰る？弟や妹いるかい？」

その満面の笑みに、愛之助の口元もゆるむ。石村先生も明るい、それとは種類の違う明るさを持つ拓一の笑顔を、愛之助はじっと見つめていた。

「愛之助おまえ、今日はどこほつき歩いてたんだ、宿題もせずによ」

夕食の席で、松坂は息子の帰りが遅かったことを咎めた。

愛之助は箸を置くと、父親の顔をじっと見た。

「石村拓一さんのところだよ。謝りに行った。足の怪我のこと」

「なっ……！」

まったく予想しなかった答えに父親が二の句

を継げずにいると、愛之助はさらに続けた。

「おれ、父ちゃんが悪い悪いと思ってたけど、拓一さんの話を聞いて、父ちゃんには父ちゃんの考えがあつたこともわかつたよ。でも、拓一さんの足を怪我させたことは、おれ許せない。先生を殴ろうとしたことも許せない。でも拓一さんが怒つてないから、もう怒らない」

愛之助はきつぱりと言つた。

母親がびっくりして自分を見つめているのがわかつた。弟も妹も箸が止まっている。

「それでおれ、ひとつ自分で決めたことがあるよ。父ちゃんがなんと言おうと、おれこれから自分の書きたいように綴り方を書く。見て、聞いて、おれが考えたとおりに書くよ」


愛之助はそう言うのと、にこつと笑つた。松坂の顔がさまざまな感情をいちどに映し出す。自分もあんな表情をする日が来るのだろうかと思ひながら、愛之助は席を立つ。どこへ行く、と背中に飛ぶ怒号に、宿題、と答える自分の声が軽やかだつた。

自室の机に座り、綴り方帳をひらいて鉛筆を取る。前のページの最後に石村先生がつけてくれた赤文字が目飛び込んで来て、何度も読んだのに、うれしい気持ちかわいてくる。

「全部書くよ、先生。今日あつたことと、ここに  
あるもの全部」

自分の胸をてのひらで押さえると、愛之助は鉛筆を握りしめ、最初の一文字を力強く綴りはじめた。

「泥流を超えて——百年後の声」  
(ペンネーム) ハチベエ



その日、私は上富良野の資料館に足を踏み入れた。展示室の片隅に、泥に埋もれた茶碗のかけらが静かに置かれている。説明文には「大正十五年、泥流災害により流出」とあつた。何気なく見下ろした瞬間、耳の奥で轟音が鳴り響き、私は一気に百年前へと引き込まれていった。

——土砂の濁流が村を襲う。叫び声、家畜の悲鳴、そして大地を揺らす奔流の力。私はその場に立ち尽くし、なす術もなくただ呑み込まれていく村を見つめていた。

その中で、一人の少年が泥の中に手を伸ばしている。必死に何かを掴もうとしていた。

「お母さん！」

泥に消える声胸を突き刺す。私は声をかけようとしたが、百年前の彼に届くはずもなかった。

ハツとして目を開けると、再び展示室の静けさに戻っていた。ガラス越しの茶碗のかけらは、確かにあの泥の中から救い出された証だつた。

三浦綾子の『泥流地帯』を読んだとき、私はこの不思議な体験と重ね合わせずにはいられなかった。泥流に呑まれた人々は、絶望と喪失の淵に立たされながらも、再び土を耕し、家を建て直し、生きる道を選んでいった。大自然の力に翻弄されながらも「人は立ち上がるることができる」と語りかけてくるのだ。

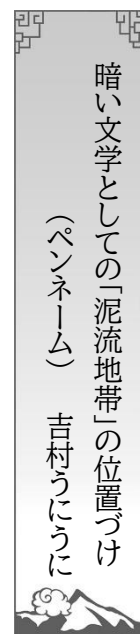
現代に生きる私たちも、異常気象や災害という「新しい泥流」に直面している。川が氾濫し、街が水没する映像はニュースで何度も目にしてきた。だが、そのたびに私はあの少年の叫びを思い出す。百年前に響いた「生きたい」という声は、今を生きる私たちにも確かに届いている。

資料館を出ると、十勝岳の頂に雲がかかっていた。山は何も語らない。ただ静かに、悠久の時間を刻んでいる。

私は心の中でつぶやいた。

——自然には勝てない。けれど、自然と共に歩むことはできる。

それこそが『泥流地帯』と『続泥流地帯』が私たちに残した、最大の遺産なのだと。



若い頃に太宰治の「人間失格」を読んだ時、自分ならもつと暗い話を書くと思った。人間失格では過敏な主人公が自滅して行く様を描いているが、紆余曲折を得てラストは穏やかな暮らしを送っている。

また、フランツ・カフカの「城」を読んで、この領域には絶対に辿り着けないと絶望した。この作品は未完だが、測量技師の主人公が永遠に仕事を得られないという話で、作者が主人公に微塵の憐憫の思いもかけないのを見て取れる。

その二作品の中間に位置するのが、スタインベックの「怒りの葡萄」だ。これはアメリカのオクラホマ州に住む主人公一家が、生活の糧を求めて西部に移住し、差別や暴力と闘いながら一人また一人と斃れ、消えてゆく。ラストは災害によって全滅を予期させるが、神々しいまでの行為で読者に救いに似たシーンを見せて終わる。悲惨な中に光を入れた読後感が得られる。

三浦女史の「泥流地帯」は、怒りの葡萄に似た悲劇ドキュメンタリーのような作品になっているが、作者の暖かい視線に気づかされる。主人公の耕作は十勝岳噴火の前にも、学校での不満、深城との諍い、貧困による進学断念と、

次々と不幸に見舞われる。だが、学校では友の言葉に学びを得、深城には石を投げつけそれが彼の人生に少なからず影響を及ぼし、進学には、不運や理不尽に対して力強く抵抗する逞しきが見られる。そして、その抵抗する姿に影響を受けて、節子、兄の拓一、菊川先生という理解者が現れる。こうした味方を得て、耕作は打ちひしがれても必ず立ち直る道歩んでいる。それは泥流に家と家族を押し流される最大級の悲劇を受けても変わらない。

この作品では、耕作と拓一の強さが目立っている。これは裏を返せば、強くなければ救いは無いという作者の厳しさが垣間見られる。しかし、二人を襲う悲劇は、読者に嫌な気分を湧き起こすものの、次は必ずいい事があると予期させ、嫌な気分のまま読み進める事がない。これには作者の暖かい眼差しが随所に散りばめられ、作品全体が二人の応援歌となっているように感じる。

大正泥流を伝え続けるということ

岩男 香織



上富良野町の歴史を語る上で欠くことが出来ないのが、1926(大正15)年5月24日の十勝岳大爆発(以下「大正泥流」と表記)である。筆者がこの災害を知ったきっかけは、三浦綾子の小説『泥流地帯』および『続泥流地帯』を読んだことである。

1922(大正11)年生まれの綾子は当時満年齢で4歳になったばかりである。綾子の自伝的小説『草のうた』では、幼少期から女学校時代の回想が記されているが、この災害に関する言及はない。当時のことを「覚えていない」のは無理もなからう。

気象庁のホームページを閲覧すると、その後も十勝岳は1962(昭和37)年と1988(昭和63)年に噴火が観測されている。

1962(昭和37)年6月29日22時40分頃の噴火<sup>1</sup>は、綾子にとって強烈な印象を残している。自著『明日をうたう——命ある限り』第一章「苦難をテーマに」には以下のとおり書いている。

雑貨店を始めて二年目、一九六二年六月、十勝岳にかなりの爆発があった。朝起きると真つ青に澄んだ空が窓一杯に広がって

た。何という美しさかと見とれていて、ハツとした。東南の彼方に、岩壁のように真つ直ぐに切り立った異様な雲が空を二分していた。その雲は無気味に動かない。それが十勝岳爆発の噴煙の姿だった。私は店をほったらかしにして、その日近くの空地に走って行つては、幾度も幾度も噴煙を眺めた。

その日の真夜中、私はふと起き出した。窓にへばりついた私の目に、十勝岳の方角に一点、業火のような赤い火が見えて、思わず眠っている三浦を呼び起こした。

(やはり地球は燃えている)  
私は燃えている地球の火を自分の目で見ただけに興奮した。

三浦に「泥流地帯」を書くように勧められた時、かつて見たその光景も思い出し、心動かされたのであった。

「1962年 十勝岳の噴火」という映像がNHKアーカイブスのサイトで公開されている。動画を再生すると、噴煙が120キロはなれた札幌からも見えたことや、火山灰は網走方面にも及んだことが報じられている。<sup>2</sup>

この映像を見れば、綾子が店を放り出して「幾度も幾度も噴煙を眺めた」ことに首肯出来るよう。

直近では、1988(昭和63)12月10日、1989(平成元)年3月5日にかけて小規模な噴火が観測されている。

「1988年 十勝岳 活発な火山活動」<sup>3</sup>  
という映像もNHKアーカイブスで公開されており、この動画も視聴してみた。ドーンという爆発音や発生した泥流が流れていく様子、上富良野町や美瑛町が町民の避難に備えてバスを待機させている様子が紹介されており、『泥流地帯』を読んだ者からすれば気が気でない場面であった。

だが、恥ずかしながら筆者にはこの噴火についての記憶が全くない。このとき筆者は中学生だったので、年齢的に覚えていないは通用しない。一方で1991年の雲仙岳噴火については、今でもよく覚えている。この違いを考えたが、当時は北海道にゆかりのある親戚や友人は全くいなかった。北海道に興味がなかったことがあげられる。対し、長崎には修学旅行も含めて2、3回訪れている。また4年ほど福岡に住んでいたこともあり、雲仙岳はローカルニュースなどで十勝岳に比べるとはるかになじみがあった。

もし、多感な10代の時期に『泥流地帯』を読んでもおれば、関心の持ち方も違ったように思えるが、それはあくまで「三浦綾子の小説で知っ

ている」の域を出なかったように思える。

事実、2007年の夏に上富良野町を訪れるまでは、小説を読んでいても大正泥流は「自分が生まれるはるか昔に起こった」出来事ではなかった。この印象が変わったのは、故清野てい(旧姓吉田)さん宅を訪れたときである。

20年近く前のことなのでこの訪問についての記憶が曖昧なことをお許しいただきたい。けれども、「いさんが」あそこまで泥流が来たので「すよ」と緑が覆い茂る山の麓を指で示されて説明して下さったこと、その声がやさしかったことは今でもよく覚えている。

泥流に飲み込まれたことは知識として知っているが、どこを見てもそんな惨事があったとはどうしても信じられなかった。

玄関からあがってすぐの場所にハザードマップが貼られていたこともよく覚えている。

地図上には、過去の泥流の痕跡と「いつか起こりうる災害」が二色で示されていた。

今日では、自治体がハザードマップを各世帯に配布するのは珍しいことではない。当時のわたしは「ハザードマップ」という概念を持ち合わせていなかった。防災に関する意識もないと言っても過言ではなかった。だが、地図をみているうちに「ここも状況によっては泥流に飲み込まれるのかもしれない」と思うと、急に足元が崩

れるような気持ちになった。

一方で、かつて泥流に飲み込まれた場所で草木が覆い茂っているのは災害からの復興の証しである。またこのような地図を各家庭に配布されていることに頼もしきを感じた。

この訪問から10年後の2017年、偶然にも『泥流地帯』映画化プロジェクトが上富良野町で進行中であると知った。映画の公開を「今か今か」と待ちながら、『泥流地帯』や『続泥流地帯』を読み直すうちに、大正泥流や上富良野町の歴史についても詳しいことが知りたくなった。

幸いなことに、官報や十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929年)だけではなく、道内の報道でさえもインターネットで確認ができる。当時の報道や機関誌「郷土をさぐる」などを国立国会図書館で閲覧する中で感じたことは、「大正泥流からの復興を後世に語り継ぐことで、今日の上富良野町がある」ということである。

例えば、2017年3月には、上富良野町郷土をさぐる会『十勝岳 やまと共に生きる 1926(大正15)年 噴火泥流災害90年回顧誌』(上富良野町郷土をさぐる会90年回顧誌企画委員会、2017年)という冊子が発刊されている。この冊子では、大正泥流だけではな

く、1962年の噴火災害および1988年、1989年の噴火についても詳細な記録が残されている。

目を引くのは、防災対策の充実ぶりである。例えば、1986(昭和61)年、初めて防災計画の全面改訂がなされたが、当時の避難訓練は防災の日にあわせて9月1日に実施されていた。その後、1995(平成7)年度からは美瑛町と期日を合わせた合同避難訓練となり、翌1996(平成8)年度からは「避難のほかに通信、救助・救出、避難者輸送、避難所開設、炊き出し、物資輸送等その年ごとに、防災関係機関による訓練内容を複合した総合型訓練」となり、2001(平成13)年度からは、北海道上川支庁など主要機関も参加するようになった。<sup>4</sup>

2025(令和7)年2月19日、20日に「令和6年度 十勝岳噴火総合防災訓練」(主催 十勝岳火山防災協議会)が実施された。上川総合振興局地域創生部地域政策課の報道発表でその内容が確認できる。参加機関は、上富良野町や美瑛町だけではなく、中富良野町、富良野市、南富良野町、新得町、大雪消防組合消防本部、富良野広域連合消防本部、北海道、上川総合振興局、十勝総合振興局、札幌管区気象台、旭川地方気象台、北海道開発局、陸上自

衛隊第2師団、北海道警察、旭川日赤病院、旭川医科大学病院、北海道電力ネットワーク株式会社など約30機関(約750人)である。訓練項目も非常に多岐にわたっている。初日は災害対策現地合同本部運営訓練から始まり、陸上自衛隊のヘリコプターによる視察、避難所開設・運営訓練がなされた。二日目には、上富良野町や美瑛町の町民も参加して、避難訓練や避難所の開設・運営訓練や炊き出しの訓練、地元消防団や警察・消防・自衛隊らによる未避難者の捜索や救助救出訓練などが行われた。特筆すべきは二日ともドローンを使用した映像伝送訓練がなされていることである。<sup>5</sup>

1988年の噴火時は、ヘリコプターから撮影した噴煙が報じられたことを考えれば隔世の感がある。

#### 補記と訂正

大正泥流発生直後には「十勝岳大爆発」という活動写真が上映されている。詳細は昨年の拙稿<sup>6</sup>で記したので割愛する。

前回の拙稿において函館新聞マイクロフィルム(国立国会図書館所蔵)の確認が漏れていたことをお詫び申し上げる。また、フィルムの撮影開始から官報に記録が残るまでの状況を下線部の通り訂正をさせていただきたい。文中の

敬称は省略した。

5月26日(水)、早朝、北海道庁保安課警部・浅野、社会課嘱託・西田、上富良野町役場書記、青年団員、消防組員、北海タイムス社・小樽新聞社の記者および写真班ら20余名は上富良野村を出発。十勝岳に登山し、平山硫黄鉱業所の災害状況、爆発火口を視察。富良野川泥流通過跡を沿って下山。罹災状況の調査を行った(5月27日)。<sup>7 8 9</sup>

※堀内商会の撮影には、函館新聞の特派員も合同で加わったと思われる。<sup>10</sup>

5月27日(木)、上富良野町村役場書記ら一行が帰村。<sup>11</sup>

5月28日(金)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が札幌市内の活動写真館・美満寿館および松竹座にて開催。<sup>12 13</sup>

同日夜、函館市内の活動写真館・錦輝館および遊楽館でも上映される(30日)。<sup>14 15</sup>

5月29日(土)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が活動写真館・美満寿館および松竹座(札幌市)、八千代館および電気館(小樽市)、美満寿館(旭川市)にて行われる。<sup>16</sup>

同日夜、宝来館(函館市)でも上映される。<sup>17</sup>  
5月31日(月)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が活動写真館・若松館、富士館、手宮館(小樽

市)にて開催。<sup>18</sup>  
6月1日(火)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が室蘭市、帯広にて開催。<sup>19</sup>  
6月2日(水)、上富良野村の被害状況が同日付官報に掲載。<sup>20</sup>

右記の通り、大正泥流からわずか5日後、つまり1926年5月29日(土)の夜には、旭川市内の活動写真館・美満寿館でも上映されている。<sup>21</sup>

美満寿館は、1920(大正9)年12月17日に常設活動写真館・二六館(4条通7丁目左6・7号)として開館、1922(大正11)年6月30日に美満寿館と改称。その後1939(昭和14)年7月20日には旭川東宝映画劇場と改称している。<sup>22</sup>

上富良野町郷土をさぐる会が編集・発行している機関誌「郷土をさぐる」第38号(国立国会図書館蔵)に掲載された「桐山英一氏からの聞き書き」に興味深い文章があったので引用する。

十九歳の時、アルバイトで無声映画の活動弁士をした。それが面白くてやみつきになり、無声映画の活動弁士になった。その頃の給料といえは、月三十円ほどだったが、私は活動弁士なので百八十円もらっていた。

た。道新の前身であるタイムスと「タイムス読者映画会」という六カ月の契約をした。活動写真からトーキー映画に移り変わるころである。<sup>23</sup>

桐山は1906(明治39)年生まれ<sup>24</sup>なので、年齢の「十九歳」は数え年で述べた可能性もあるが、1924(大正13)年〜1925(大正14)年には活動弁士の仕事を始めたと思われる。

その後、1941(昭和16)年に生まれ故郷の上富良野町に戻って映画館(上富良野劇場)の経営を始める。興味深いのは活動弁士時代の箇所である。

無声映画の活動弁士では札幌や小樽、旭川へ行った。結婚してからは室蘭にも行ったことがある。私の師匠の増田ふうかという人が旭川で「みます館」を経営するようになり、手伝うために旭川へ通った。<sup>25</sup>

原文では一部平仮名で表記されているが、桐山の師匠は「増田楓華」であり、彼が経営していたのは「美満寿館」である。

前述の『草のうた』には、当時小学3年生の綾子が活動写真に魅せられた様子が記されている。綾子は父の名刺を映画館に持参するとタダで入場できるので、その特権を活かして映画鑑賞にいそしんでいた。なんと贅沢な小学時代

であろうか。

その頃旭川には、五つほどの映画館があった。私の最も好きな弁士は、美満寿館の増田楓華という人だった。肥り肉の、背の余り高くないあから顔の人だったが、何しろ声がいい、イントネーションがいい。映画の始まる前に彼が演台に立つと、観客は大きいに拍手したものだ。当時の映画は色も音もない。が、それを補って、スクリーンの下に楽隊席がある。一段下の場所だから観客の邪魔にはならない。悲しい場面になると、バイオリンがいと悲しい音色を奏でる。喜劇になると、ドラムもクラリオネツトも総動員される。(『草のうた』<sup>13</sup>)

更科源蔵編著『北海道映画史』(クシマ、1970年)では、昭和初期に撮影された増田楓華の風貌が確認できる。<sup>26</sup>見た人は綾子の記憶力の良さと的確な表現に舌を巻くであろう。

記録映画の上映説明は新人が行う慣例がある。もしかしたら活動弁士としての経験が浅い桐山が「十勝岳大爆発」の実況を行ったかもしれない。仮に他の弁士が説明をしたとしても、活動弁士として仕事をしている以上は、どこかでこの映像を目にした可能性は否定できないであろう。

同様に、綾子が美満寿館で活動写真を見た

際に、桐山の上映説明を耳にしたかもしれない。綾子と桐山が美満寿館周辺ですれ違ったかもしれない。

とはいっても、根拠となる資料が見当たらない以上、筆者の空想でしかない。だが、今後、桐山英一が活動弁士だった頃の資料が見つければ、上富良野町の郷土史は勿論だが、北海道映画史にとっても大きな価値があるのは言うまでもない。

2026年は、大正泥流から100年の節目であると同時に、「泥流地帯」連載開始から50年の年でもある。昨年同様に様々な期待や妄想に胸を躍らせつつ本稿はここまでとする。

底本

『三浦綾子全集 第12巻 風吹く時も、雪のアルバム、草のうた』主婦の友社、1992年11月11日  
『明日をうたう——命ある限り』角川書店、1999年12月25日

主要参考文献

国立国会図書館所蔵の小樽新聞、函館新聞、北海タイムスの報道、その他インターネット検索で得られた情報量件数が多くなるため、註のみの記載とした。  
とくに上富良野町郷土をさぐる会編・発行「郷土をさぐる」第1巻～第42号(国立国会図書館所蔵)については個々に記すと膨大な量となるため、以下 URL 記載に留めさせていただく。  
かみふらのの郷土をさぐる会機関誌トップページ(参照.2025-9-30)  
<https://www.town.kamifurano.hokkaido.jp/hp/saguru/index.htm>  
郷土をさぐる発刊物一覧(PDF) (参照.2025-9-30)  
<https://www.town.kamifurano.hokkaido.jp/hp/saguru/kiji-list2025.pdf>

図書

片岡一郎『活動写真弁士 映画に魂を吹き込む人びと』共和国、2020年10月30日  
上富良野百年史編纂委員会編『上富良野百年史』上富良野町、1998年8月発行日記載なし  
国際映画通信社編『日本映画事業総覧 昭和2年版』国際映画通信社、1926年12月24日  
札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫 49 札幌と映画』北海道新聞社、1999年6月27日  
更科源蔵編著『北海道映画史』クシマ、1970年9月15日  
田中館秀三 編『十勝岳爆発概報：大正一五年六月二五日』、田中館秀三、大正15。  
※国立国会図書館デジタルコレクションを使用。  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/981513> (参照 2024-06-07)  
田中純一郎『日本映画史発掘』冬樹社、1980年4月25日  
田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ 活動写真時代』中央公論社、1980年2月20日  
田中純一郎『日本映画発達史Ⅱ 活動写真時代』中央公論社、1980年3月20日  
田中純一郎『日本映画発達史Ⅴ 映像時代の到来』中央公論社、1980年6月20日  
田中純一郎著、本地陽彦監修『秘録・日本の活動写真』ワイズ出版、2004年12月25日  
十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929年3月25日  
西川昭幸『日本映画一〇〇年史 明治・大正・昭和編』ごま書房新社、2016年3月30日  
西村正美 著『小型映画：歴史と技術』、四海書房、1941年12月15日  
※国立国会図書館デジタルコレクションを使用。  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1871324> (参照 2024-06-11)  
前川公美夫『大正期北海道映画史』亜璃西社、2023年8月31日  
吉原順平『日本短編映像史——文化映画・教育映画・産業映画』岩波書店、2011年11月29日

機関誌

聞き取り記録者＝加藤清、岩田賀平 桐山英一氏からの聞き書き 上富良野町郷土をさぐる会編・発行「郷土をさぐる」第38号、2021年4月1日、p75-82  
上富良野町郷土をさぐる会『十勝岳 やまと共に生きる 1926(大正15)年 噴火泥流災害 90年回顧誌』(上富良野町郷土をさぐる会90年回顧誌企画委員会、2017年3月27日)

紀要

三浦泰之『戦前・戦後の北海道を生きた撮影技師・栃木栄吉の生涯：北海道記録映画史序説』(所収「北海道開拓記念館研究紀要」第42号、2014年)、p143-202

新聞・雑誌記事等

官報

北海道上富良野附近と秋田縣北浦町の災害 内務省警保局「官報」第4131号附録、大蔵省印刷局編、1926年6月2日、雑報149、p3-4  
大蔵省印刷局 [編]『官報』1926年06月02日、日本マイクロ写真、大正15年。国立国会図書館デジタルコレクション (参照 2024-06-07)  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282> (参照 2024-06-07)  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/17>  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/18>  
官報第3835号附録 大蔵省、1926年6月6日、p13 大蔵省印刷局 [編]『官報』1925年06月06日、日本マイクロ写真、大正14年。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2955983> (参照 2024-06-07)  
官報第1727号附録 大蔵省印刷局 [編]『官報』1932年09月30日、日本マイクロ写真、昭和7年。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2958198> (参照 2024-06-07)  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2958198/1/26>

雑誌記事

大槻茂 十勝岳大爆発[大正15年5月]の秘録フィルム発見! 「週刊読売」12月17日増大号、第36巻第53号、通巻第1525号、読売新聞社、1977年12月17日、p166-168  
巻末モノクログラフィア 十勝岳大爆発 「週刊読売」12月17日増大号、第36巻第53号、通巻第1525号、読売新聞社、1977年12月17日  
「十勝岳大爆発」の記録制作者がわかる 「週刊読売」1978(昭和53)年1月1日号、第37巻第1号、通巻第1527号、読売新聞社、1978年1月1日、p33  
田中純一郎 連載 日本教育映画発達史(6)「視聴覚教育」1969年11月号、第23巻第11号、通巻第265号、日本視聴覚教育協会、1969年11月1日、p96-99 ※国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/6068181> (参照 2024-06-11)

新聞記事

1926年5月24日～5月31日 小樽新聞、函館新聞、北海タイムス(いずれも国立国会図書館所蔵)は、註にてご確認をお願い申し上げます。  
1926年5月25日 読売新聞朝刊3面  
十勝嶽大爆発 死者多数出づー温泉場も全滅  
1977年12月6日 読売新聞朝刊14版22面(東京)  
「週刊読売」12月17日号広告  
1977年12月7日 読売新聞夕刊道内版4版5面  
秘録 大正15年「十勝岳大爆発」泥流、恐怖のドラマ、

株式会社マツダ映画社・無声映画鑑賞会について

公式サイト

株式会社マツダ映画社ホームページ  
<https://www.matsudafilm.com/>

図書

松田豊編『活狂たちの半世紀—無声映画鑑賞会50年史—』無声映画鑑賞会、2009年8月8日  
映画プログラム

「クラシック映画ニュース」第790号、マツダ映画社内無声映画鑑賞会、2024年5月1日  
※説明 尾田直彪 覆面番組 制作年不明 堀内商会制作記録映画 十勝岳大爆発 「クラシック映画ニュース」第790号、マツダ映画社内無声映画鑑賞会、2024年5月1日、p11

<sup>1</sup> 気象庁 | 十勝岳 有史以降の火山活動(参照,2025-8-13)

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/sapporo/108\\_Tokachi/108\\_history.html](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/sapporo/108_Tokachi/108_history.html)

6月29日噴火:22:40頃、中央火口丘南側湯沼付近から噴火。噴石により大正火口縁の硫黄鉱山事務所を破壊。死者5名、負傷者11名。翌30日2:45頃から噴火。火山弾、火山灰を多量に噴出、噴煙12000m。降灰は知床、南千島方面、爆発音190kmに達する。火柱を伴う噴火は7月5日頃まで続いた。

<sup>2</sup> 1962年 十勝岳の噴火 | 災害 | NHKアーカイブス(参照,2025-8-13)

クレジットは以下の通り。ジャンル=災害 > 火山 > 火山(ニュース)、番組名=十勝岳爆発、放送=1962年度、地域=北海道

[https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0026010077\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0026010077_00000)

<sup>3</sup> 1988年 十勝岳 活発な火山活動 | 災害 | NHKアーカイブス(参照,2025-8-22)

クレジットは以下の通り。番組名=NHKニュース・トゥデー、撮影・収録=1988年12月20日

[https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0026010504\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0026010504_00000)

<sup>4</sup> 上富良野町郷土をさぐる会「十勝岳 やまと共に生きる 1926(大正15)年 噴火泥流災害90年回顧誌」上富良野町郷土をさぐる会90年回顧誌企画委員会、2017年3月27日、p198

<sup>5</sup> 上川総合振興局地域創生部地域政策課 令和6年度 十勝岳噴火総合防災訓練の実施について(危機対策室)2025年2月5日付

[https://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/fs/1/1/2/2/5/1/9/5/\\_/%E7%99%BA%E8%A1%A8%E8%B3%87%E6%96%99\)%E4%BB%A4%E5%92%8C6%E5%B9%B4%E5%BA%A6%20%E5%8D%81%E5%8B%9D%E5%B2%B3%E5%99%B4%E7%81%AB%E7%B7%8F%E5%90%88%E9%98%B2%E7%81%BD%E8%A8%93%E7%B7%B4%E3%81%AE%E5%AE%9F%E6%96%BD%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6.pdf](https://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/fs/1/1/2/2/5/1/9/5/_/%E7%99%BA%E8%A1%A8%E8%B3%87%E6%96%99)%E4%BB%A4%E5%92%8C6%E5%B9%B4%E5%BA%A6%20%E5%8D%81%E5%8B%9D%E5%B2%B3%E5%99%B4%E7%81%AB%E7%B7%8F%E5%90%88%E9%98%B2%E7%81%BD%E8%A8%93%E7%B7%B4%E3%81%AE%E5%AE%9F%E6%96%BD%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6.pdf)

<sup>6</sup> 岩男香織、協力=尾田直彪 フィルム「十勝岳大爆発」(株式会社マツダ映画社所蔵)に関する覚書

『二〇二四年度 第五回 泥流地帯 作文コンクール作品集』(『泥流地帯』映画化を進める会、2025年3月)所収、p64-71  
[https://www.town.kamifurano.hokkaido.jp/contents/02kikaku/0210sinko/deiryufilmpro/2024deiryu\\_sakubun-sakuhin.pdf](https://www.town.kamifurano.hokkaido.jp/contents/02kikaku/0210sinko/deiryufilmpro/2024deiryu_sakubun-sakuhin.pdf)

<sup>7</sup> 十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929年3月25日、p55 参照。本稿は国立国会図書館デジタルコレクションを参照。<https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387> (参照 2024-06-07)

以下の本文があるが、「十勝岳大爆発」(マツダ映画社所蔵)の映像の時系列は同じである。

此の日道庵保安課浅野警部、社会課西田囁託、上富良野村役場書記、青年團員、消防組員、北海タイムス社、小樽新聞社記者並に寫眞班等一行二十餘名は、早朝上富良野を出発して、十勝岳に登山し平山鑛業所災害の状況、爆発火口を視

- 察し更に富良野川泥流通過の跡に添って下り罹災状況を調査し翌二十七日歸村した。
- <sup>8</sup> 十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929年3月25日、p441に「殊に北海タイムス社および小樽新聞社は各活動寫眞班を組織し、災後の危険を冒して實況を撮影し、之を道内各地に於て影寫して實感を深からしめた」とある。
- 本稿は、国立国会図書館デジタルコレクションを参照。  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387> (参照 2024-06-07)
- <sup>9</sup> 本社活動寫眞班 昨朝富良野の現場へ 北海タイムス 4面、第12672号、1926年5月26日
- <sup>10</sup> 1926年5月28日(5月27日夕刊)函館新聞、第11061号、3面  
 広告文には「札幌堀内商會當部特派合同決死的大撮影」とあるので、函館新聞社の特派員らも同様に参加したと思われる。
- <sup>11</sup> 十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929年3月25日、p55参照。本稿は、国立国会図書館デジタルコレクションを参照。  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387> (参照 2024-06-07)
- <sup>12</sup> 第4章大正時代の上富良野町 第10節十勝岳大爆発 上富良野百年史編纂委員会編『上富良野百年史』1998年8月発行日記載なし、上富良野町、p563参照  
 岩男註:本文の旭川市内の活動寫眞館・美満寿館および松竹座は札幌市のを指すと思われる。また5月29日付北海タイムスにて28日に行われた「十勝岳大爆発」の上映会について報じられたとしているが、29日の記事内容は上映会案内である。
- <sup>13</sup> 硫黄山爆発の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隨を許さぬ絶品 北海タイムス 4面、第12676号、1926年5月30日
- <sup>14</sup> 1926年5月28日(5月27日夕刊)函館新聞、第11061号、3面  
 5月30日分の広告は確認できなかったが、広告文には「公開僅か三日間限り」とあるので、5月30日まで上映されたと思われる。
- <sup>15</sup> 前川公美夫『大正期北海道映画史』亜瑠西社、2023年8月31日、p20参照。5月27日の函館日日新聞に広告文が掲載されたことを指摘。
- <sup>16</sup> 硫黄山爆発の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隨を許さぬ絶品 北海タイムス 4面、第12676号、1926年5月30日
- <sup>17</sup> 1926年5月28日(5月27日夕刊)函館新聞、第11061号、3面  
 5月27日の夕刊は、5月28日の朝刊と同時に配達されるので、広告文の「急告明日より」は29日と思われる。
- <sup>18</sup> 硫黄山爆発の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隨を許さぬ絶品 北海タイムス 4面、第12677号、1926年5月31日
- <sup>19</sup> 硫黄山爆発の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隨を許さぬ絶品 北海タイムス 4面、第12677号、1926年5月31日 岩男註:「映写する」は原文ママ  
 記事に「明後一日は室蘭市帯廣に於て映写する事に決定しました」とある。
- <sup>20</sup> 北海道上富良野附近と秋田縣北浦町の災害 内務省警保局「官報」第4131号附録、大蔵省印刷局編、1926年6月2日、雑報149、p3-4  
 岩男註:秋田縣北浦町は、現・秋田県男鹿市。  
 本稿では、大蔵省印刷局 [編]『官報』1926年06月02日、日本マイクロ写真、大正15年、国立国会図書館デジタルコレクションを使用した。(参照 2024-06-07)  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282> (参照 2024-06-07)  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/17>  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/18>
- <sup>21</sup> 硫黄山爆発の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隨を許さぬ絶品 北海タイムス 4面、第12676号、1926年5月30日
- <sup>22</sup> 『新旭川市史 第五巻 年表・索引』(旭川市 平成24年)に収録されている年表「旭川のできごと」による。本稿では以下URLにより特定。  
<https://adeac.jp/asahikawa-city/timeline/tm000001>
- <sup>23</sup> 聞き取り記録者=加藤清、岩田賀平 桐山英一氏からの聞き書き 上富良野町郷土をさぐる会編・発行「郷土をさぐる」第38号、2021年4月1日、p76  
 岩男註:以下URLで全文の閲覧が可能。  
<https://www.town.kamifurano.hokkaido.jp/hp/saguru/3805kiriya.htm>
- <sup>24</sup> 聞き取り記録者=加藤清、岩田賀平 桐山英一氏からの聞き書き 上富良野町郷土をさぐる会編・発行「郷土をさぐる」第38号、2021年4月1日、p82  
 岩男註:p82に「桐山英一氏の経歴」が掲載。1906(明治39)年6月24日に上富良野村(現上富良野町)で生まれ、1982(昭和57)年6月23日逝去。
- <sup>25</sup> 聞き取り記録者=加藤清、岩田賀平 桐山英一氏からの聞き書き 上富良野町郷土をさぐる会編・発行「郷土をさぐる」第38号、2021年4月1日、p77
- <sup>26</sup> 更科源蔵 編著『北海道映画史』クシマ、1970年9月15日、p34  
 本稿は、国立国会図書館デジタルコレクションを参照。  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12437187> (参照 2025-09-30)

愛すべきは耕作の人柄

(ペンネーム) くうりん



「どうして自分ばかり、こんな目にあうのだろう」。

そんな嘆きを口にした当時、私は右手の中指を切断したばかりだった。

原因は、勤務していた職場での不慮の事故のせいだった。

右手の中指の第一関節から上を切断した私は、近くの病院に運ばれ、そこで縫合手術をされた。

「指先は神経が集まっている場所だからね。今夜は痛むかもしれないから、痛み止めを出しておくね。それと、指先を心臓よりも上に挙げておくようにしてね」。

医者から言われたときは、はいとうなずいた私だった。その「痛み」がどれほどのものか、想像できなかったからだ。

その日の晩、私は痛みになされた。指先が吠えるような、どうしようもないほどの痛みだった。

痛み止めを飲んでも効果がなく、体中から脂汗が出てきた。じっとしていられず、立ったり座ったりした。

それでも、指先を心臓より上に挙げたまま

耐えるしかなかった。

結局一睡もできぬまま、私は朝を迎えることになった私。

「どうして自分ばかり、こんな目にあうのだろう」という台詞は、その日の日記に、左手で綴った言葉である。思えばそれから一ヶ月ほどは辛い日々が続いた。

『泥流地帯』続泥流地帯の主人公である耕作は同じ意味の言葉を口にしていて。

「どうして自分ばかり、こんな目にあうのだろう」。

父は事故で既に鬼籍に入っている。残された母は子ども達を養うために、旭川で修行をする。四人の子ども達は、祖父母と共に暮らすしかなかった。

とはいっても、貧しい農村が舞台であるゆえ、贅沢な暮らしはできなかった。白い御飯など食べられず、麦が混じった御飯しか食べられない。都会では皆が白い御飯を食べているというのに。そこに泥流が襲う。都会人だけでなく、農村で生活する人にも分け隔て無く襲ってくる泥流。

都会人には「不慮の自然災害の一つ」かもしれないが、普段から苦しい生活を強いられる農村で暮らす人には、追い打ちを掛ける自然災害でしかなかった。

そう考えると、前述した耕作の嘆きは当然である。

確かに常に沈着冷静で、文句など口にはせず、確かな判断をする祖父の市三郎や、耕作の兄である拓一は、自然災害の場でもっとも活躍できる人であるに違いない。

現代だったらこの二人は間違いなく「ヒーロー」である。

しかし、私には耕作こそ人間味溢れる人物であり、愛すべき人間であるように思えて仕方がない。

「どうして自分ばかり、こんな目にあうのだろう」という本音を口にしてしまうからである。自然災害は自分のせいではなく、自然が勝手に起こす災害だ。それゆえ、被害を被った人間は怒って当然だと思う。

「どうして苦しい生活をするオレたちに、追い打ちを掛けるようなことをするんだ！ 自然のバカヤロー！ 神様のバカヤロー！」。

そんな叫びこそ、自然災害を前にした人間の反応ではないかと思うのだ。

自然災害は人の手ではどうしようもないもの。決して「因果応報」ではない。これは自然が勝手に起こした災害。だからこそ、私たちに非はないのだから、ありったけの文句を自然や神様に対してぶつけてもよいのではないか。

私の右手の中指の事故は、自然災害ではなく人災だった。

それでも、「どうして自分ばかり、こんな目にあうのだろう」という嘆きはあふれ出てきた。

「神様はどうしてオレにこんな仕打ちを与えらんだ。神様のバカヤロー！」

そんな言葉を口にしたことも、一度や二度では無かった。

耕作も同じだ。自分を恨むのではなく、自然や神様を恨むことで、自分の気持ちを安定させようとしたのだ。

映画「ダイ・ハード」シリーズで、ブルース・ウィリスが演じる主人公も言う。

「なんでオレばかりこんな目に」。

それでも彼は、テロリストを相手に果敢に攻め、最後は勝利を手にする。文句を口にすることで自分を落ち着かせた結果だと私は分析する。

『泥流地帯』『続泥流地帯』をぜひ映画化して欲しい。そして、私の愛でる耕作の言動に期待をしたい。

巻造（MAKIZO）

（ペンネーム） まるごと紅はるか



家族には本当に苦労をかけてしまったてえ…。悔やんでも悔やみきれねえ思いでございます。へえ。

いえいえ、とんでもねえ。なんもかんもオラが悪いんできあ。

オラに甲斐性がねえばかりに、子供らにはひもじい思いも、惨めな思いもさせちまったし、女房にも苦労かけっぱなしでしてね。

背丈もなけりや力もねえ、石村のじっちゃまみてえに頭もよくねえもんで、言い訳じみた話になつちまいますけども、それでも、それでもオラなりに、精一杯生きてきたつもりでございます。

めんこい娘を…福子を、深城の旦那に取られちまつてからは毎日泣きながら暮らしたもんです。

いや、なんもなんも、オラ博打なんて本当は打ちたくもねえし、酒だつて別段、好きで飲んでるわけじゃあございません。

へえ、これだつて言い訳に聞こえるかもしれませんけどもね、オラに甲斐性ねえことが、なんぼなんでも家族に申し訳なくて。それにね、こんな自分があまりにも惨めで、ご先祖様にも顔向けできねえ思いでしてね。

それでも畑で仕事してる間はなんぼか気も紛れるんですが、夜になりますとこう、どうにも頭の中がモヤモヤというか、不安というか、なんていうんでしようかね、寝るのも恐ろしくなつちまうんで。

そうしますと、深城の旦那がもう、ほとんど無理矢理ですよ、店の若い衆が馬車や馬そりで迎えにくるんです。そりやさすがに申し訳ねえつて、こつちから出向くようにはしましたけどもね。

それでもつて酒ば飲まされてサイコロも振らされるんで。

特に福子を取られてからはそりやもう頻繁で、本当に困ったもんでした。

オラも若い頃は、酒なんぎここれっぽっちも飲めなかつたもんです。

オラの親父つてのがまあ、また飲んべたれでしてね、「曾山の巻造は親父に似ないで働きもんだ」つて褒められたもんです。

ましてや博打なんて、とてもとても。

なんせ無理矢理やらされてたもんで、こんな大仰に聞かれましたもね、あんた様に申し上げるような話は、これっぽっちもありませんで。

へっ？ 酒ですか？

さつきも言いましたけど、好きで飲むつてよりは不安でね、仕方なく…いや、ええ？ こ

んなどころで頂けるもんですかね。

ええ、はあ、飲みながらの方が話しやすいってことで…？

へえ、ここだけの話ですが、ここんところしばらく寝たきりで碌に飲んでねえもんで…へえ、そんじや遠慮なく、一口だけ頂戴しやす。へへ。

…うん…こりやいい酒ですな。

博打のきっかけですかい？もう二十年近く前になるでしょうか、大層な豆景気がございましてでしょう。

オラたち日進部落の小作も、ずいぶん儲けさせていただきました。ええ、オラみたいなポンクラでも、豆さえござえておけば、まずまず手元に残ったんでさあ。

その頃でございます、部落の若い衆といっしよに深城の旦那に誘われまして、へえ、札(花札)ですな。

深城の旦那がやってる飲食店の二階に、夜な夜な男衆が集まりました。

…へい、あつ、ありがとうございやす、美味いもんですな。

そんで、村では見たことのない若い連中でしたがまあ、みんな気さくなもんで、わいわいと楽しく遊ばしてもらいました。

そうするとその日はひと晩で八円五十銭も勝っちゃったんです。

いや、それはもう嬉しくてね、その晩のうち

に料理屋でね、へへ、ぱあつと使わせてもらったんですがもう、夢のようですね。

ところがですよ、次の日にも連れて行かれて今度は十二円もスッチまったんでさ。

いやあ、さすがにね、オラみたいならくでなしでも気がつきましたね。

当たり前ですよ、目が覚めたっていうんではようかね。そりやこつ思いましたよ。

博打つてやつあ、なんて平等なんだつてね。

オラみたいにひとつも取り柄のないモンはね、何をしても負けっぱなしですけどもね、へえ、大袈裟ではねえです、何をしてもダメですわな。何をしても、です。

ところが博打だら平等だもんで、勝つこともありや負けることもある。

その証拠に次の日にはね、五十銭勝ったんですな。

そりや座敷遊びつてわけにはいきませんから、その日は旦那のやつてる飲食店で若い衆に振る舞つてやりまして。

いや、それでも旦那が二円貸してくれましてね、豪勢にやらせてもらいました。

若い衆も「曾山の旦那、曾山の旦那」って慕ってくれましてね、へえ。オラのこと甲斐性なしだと思つてるおつかあのこと、見下してくる村の者も見返してやれるつてさ、そう思つたんですな。

…おつと、まだ頂けるんですか？へえ、じや遠慮なく。

ところがある日ですよ、石村んこの義平が、義平さんがね、深城の旦那の賭場に通り詰めた沢の者を片っ端から説教して回つたんですわ。胴元が勝つように仕組まれてるだの、家族の何十年先まで考えろだのつてさ。大きなおせ、いや、うん。

それで、沢の者はほとんどが旦那の賭場に足を向けなくなつたともね。

俺はさ、もともと博打なんてやりたくてやるわけでもねえからさ、そこそこに稼いだらすぐ止めるつもりだったんだよ。

まあ、義平さんは沢の兄貴分でもあるけどさ、それだけはオラの考えに任せてくれつてな。

…しかし美味いもんですな。その、もう、あれですか…あつ、頂戴します、へへ。

ひもじい思い？誰が？子供に？ああ、うちのガキどもにね。

そうさな、まあうちも土地が悪いもんで、よそ様に比べたら実入りも少ないもんですわな。

いやいや、うちじゃあ誰も飢え死にした者もおらんし、ガキ共も麦だの鯁だの勝手に食らつて、五体満足におがつて(育つて)やがるんでね、なんてこともありませんやね。

国男なんざ徴兵検査で甲種合格したんですからね。そこまで立派に育て上げたのは誰だっ

てんですよ！ はは！ 俺ですわな。なんで他人にツベコ言われなきゃならんのか、ねえ。そうでしょ？

…おかわりもらえますかな、へへ、ごちそうになりやす。

福子を売ったって？ だからさ、さつきも言ったでしょうが、俺は俺で涙で泣きぬれて暮らしたんだぜって！ へへへ！

だつたらどうしろって？

大黒柱の俺が首くくって家族全員を路頭に迷わせりゃよかつたってのかい？ そりゃあんまりでしょう。

深城の旦那にひとり預けて残りの家族が全員幸せになったんだからさ。それ以外にどうしろってんだい。

だいいち、うちのもんを煮て食おうが焼いて食おうが、誰に指図される謂れはないんだよ。

…

みんな…

俺を、見下してんだよ…偉そうによ…

どいつもこいつもよ、俺に文句があるなら村八分にでもしてみろってんだよ。ねえ？ へへへ。できやしねえよ。俺あもう十年も前によ、百姓なんざとつとと辞めて博打一本でやっていくつもりだったんだよ。

それがよ、ここのいらは五人組で互いに借金の

担保し合ってたんだけどさ、俺が抜けたら借金払えねえって、泣きついてきやがるもんだからよ。仕方なく残ってやったんだよ。

まあ言ってみれば恩人だわな。

だからよ、あいつらが偉そうにしてられるのも、いわば俺のおかげってなもんだ。

ん？ あいつらだよ、石村だよ石村。どいつもこいつも、毎度俺様のことを見下しやがってよ。何が家伝葉だ偉そうに。

じじいは俺のこと見下してるくせに気にかけてフリしやがるしよ、義平の野郎は偉そうに兄貴取りで説教たれやがる。

修平？ 昔あいつと角力するたびに片手でぶん投げられたんだ。絶対許さねえが俺が本気出しゃあひと捻りだあんな馬鹿。

何より拓一だあのガキめ畜生！ 何年か前によ、なんでもか覚えちゃいないが偉そうな講釈たれて、俺を殴りつけやがった！

石村の野郎どもはどいつもこいつもそうだ！ 家族全員で束になって俺を馬鹿にしやがる。

おう、ほれ、空になってるよ。酒！

その点よ、ウチなんかは偉いもんだぜ。ガキどもも体張って家族のために尽くしてんだ。へへ。

国男は軍隊でしつかり給金稼いでくるしよ、福子は叩きやあ幾らでも金が湧いてくる打ち出の小槌だ。

そうそう、鈴代をな、鈴代。そうだようちの娘だよ。福子の妹。一昨年の秋に深城の旦那に談判したんだよ。いくら出せるかってよ。

したらお前、こんな体弱くてひよろこい娘にビター一文払えるかってぬかしやがったんだよ。クソ野郎が！

ああ、そうだクソだよ。馬鹿にしやがって。旦那、旦那ってよ、おだてあげておけば金を回してくるからよ、俺が利用してやってんだよ。

それがあの深城の馬鹿、女郎屋の分際だよ、なあ、あんたもそう思うだろ！ 人の子をなんだと思ってるやがんだよ！ 馬鹿にしやがって！ くだばりやがれてんだ！

へへっ、まったくよ…

…おい、…おいお前。

…さつきからお前…酒が空だぞ…

…ト口くせえな。もういい、ほら寄越せ！

飲みすぎだって？ 馬鹿野郎、お前が飲ませてんだべや！ なあ！ ははは！

なんだよ、最初と態度が違うって？ 白々しいんだよ、俺が飲んだらこうなるって知ってるからわざわざ飲ませてんだろ。

ん？ 知ってるよ。わかかって飲んだんだよ。別に俺あ酒乱じゃねえぞ。

どんだけ飲んだってよ、ためえが何を言ったか、何を言われたか。何したかだって、次の日もその次の日もぜえんぶ覚えてんだよ。

村の奴らにベコベコしてる間も、早く飲んで

こいつらぶん殴ってやりてえな、ってよ。いつも思ってるぜ。

馬鹿なやつらは俺が酒のせいでごうなってると思うだろうからよ。いいんだよそのまま。

巻造さんが悪いんじゃないか、普段は大人しく優しい男がよ、ははは。酒のせい、そうだよ悪いのは酒で、俺はこれっぽっちも悪くねえってな！ ははは！

酒のせいだ乱暴「させられてます」ってよ。傑作だな、いいじゃねえか。そう思ってくれんなら、シラフの時ぐらい殊勝にしてるのは訳もねえこつた。

石村のババアがよ、「酒はキチガイ水」だつてよ、俺のことを憐れんでやがんだ。酒のせいだ可哀想にってよ！ 笑わせんじゃないか、ってな！ ババアまで俺を見下しやがつてよ！

もうさ…ははは。酒を飲ませりやボロが出るつてな。わかってるよ、さつきからツノ生えたのがウロウロしてんだからよ。

そっちでぶんぞり帰ってるの、どう見ても閻魔大王だろうが。何か喋れよ偉そうに。

俺は死んだんだろ？

審判されてることなんだよな？ 好きにしろってんだ。長い事寝たきりだったんだからよ、こんなに酒がうめえなら中風でくたばるの

も悪くねえやな。

え？ 中風じゃない？ …泥流？ 山津波？ なんだそりゃ。へえ、俺と一緒に大勢死んじまつたのかよ、まあどうでもいいけどよ。

それでよ、俺様が——えっ？ もういいって？

なんだよこれで審判が終わりつか。あつさりしたもんだな。

そんで、どうなんだい。

地獄行きではないって？ そりゃそうだと飲んべえってだけで地獄に送っちゃあ、人で溢れちまうわな。ははは！

それはそうと、深城の馬鹿たれは地獄送りにしたんだらうな？

え？ 死んでねえ？ その、泥流でか死んでないのかよ!? なんで俺が死んで深城が死なねえんだ。

そういうときは悪人から死なせて、地獄に叩き落とすもんだらうが!! 因果応報って知らねえのかよ、どうしようもねえな。真面目に仕事すれやお前ら。

いや、俺だつてまあ極楽浄土に連れてけとは言わねえよ。石村のジジイが言ってたぜ、輪廻？ なんだかつて、まんなか辺のちようどいのがあるんだろ？ そこでのんびり…え？ 違う？ 違つて何が。

俺はそっちの門つて…うわ、なんだよありや!! ひでえなおい！ なんてもん見せるんだよ気分悪いいな。

え？ あれに？ あれに生まれ変わるって？ 俺が!? 永遠に!? 駄目だ、駄目だろ冗談じやねえ!!

なに!? インガ？ 因果応報？ ふぎけんな俺が何したつてんだよ！ ああ!? 総合的にってなんだよ！ 俺みたいのが他にどう生きりや良かったんだよ！

勘弁してくれよこんなの地獄よりっ——おいやめろ!! なんで俺だけ!!

やめろっ離——(了)

## 児童生徒の部

泥流地帯(ハッピーエンド)

(ペンネーム) たいやきくん



十年後、耕作と節子は結婚した。最初は、どちらの家族も二人の結婚を否定していた。理由は、ただ一つ。三年前に節子が産婆の仕事の関係で函館に引っ越してしまい、耕作と節子の住んでいる所があまりにも遠すぎたからだ。しかし、耕作と節子は諦めなかった。十年にわたって耕作と節子は家族に交渉し続けていたのだ。その時は突然訪れた。なんと、耕作も教師の仕事の関係で函館に転勤することになったのだ。耕作は驚いて思わず声を上げた。

「こんな事が起きるなんて嬉しすぎる。」

と耕作は言った。耕作は、すぐに節子に電話で連絡した。節子も耕作と同様に声を上げた。

「こんな偶然が起こるなんてすごいわー！」

と節子は喜びで飛び上がった。二人は楽しんで、夜も眠れなかった。

それから一週間後、耕作は節子のいる函館に引っ越した。耕作と節子は感動の再会をした。節子は耕作に嬉しそうに言った。

「会いたかったわー！石村さんー！」

耕作も笑顔で答えた。

「うん！僕もだよー！」

耕作は唐突に言いだした。

「僕と結婚しよう。」

節子は顔を赤らめながら言った。

「私でよければ、喜んで結婚しますー！」

「君がいいんだ！」

「それは良かったわー！」

それから一週間後、二人は結婚式を函館で挙げた。二人は永遠の愛を誓いあった。いつまでもいつまでも幸せに暮らした。

## 壹羽の鳩

(ペンネーム)

まろ



僕は上富良野に生息しているただの鳩だ。僕はこの村で過ごし続けていろいろな人を見てきた。一生懸命畑を耕す人、楽しそうに遊ぶ子どもたち、喧嘩している人たち。この村は豊かではないなと思った。

そんなある日、「ドドン」と大きな音が鳴り響いた。この村には十勝岳という活火山がある。そこが噴火したのだ。村の人も動物たちも大騒ぎ。たちまちたくさんの木が飲み込まれた。泥流が村を襲った。泥流にのまれまいと走って逃げていたが、何人もの人が泥流にのまれていった。それを助けようと泥流のほうへ飛び込んでいくやつもいた。僕は噴火した瞬間、山ぶどうを食べていたが、とっさに羽の中にしまつて仲間の鳩と一緒に飛んで逃げたので無事だった。が、山の上のほうへ行っていた仲間の数羽は飛んできた石にぶつかって死んでしまったらしい。

泥流の流れが収まると村の人の救出が始まった。どんどん人が出てきて、一命をとりとめた人もいれば、亡くなってしまった人もいた。活気のある村は、すっかりかわってしまった。畑もダメになり、大切な人を亡くし、みな悲しそうな顔をしている。

そんな悲しみもつかの間、村では今後どうす

るか話し合いが行われていた。復興に否定的な意見が飛び交っていた中、一人が説得し始めた。それはあのとき泥流に飛び込んでいった男だった。「てっきりあのまま死んでしまったのだらうと思っていたが、生きていたのか。」と僕は驚いた。人にはこんなに勇敢な奴もいるのかと。そんな彼に僕は協力したくなって、ふと思いついた。僕はそつと彼の肩に乗り、羽の中から山ぶどうを落とす。そしてそのまま彼の肩からそつと飛び立った。少し離れたところから見守っているように思ったが、仲間に呼ばれてしまった。新しい巣を探さなければいけない。僕は仕方なくその場を去った。僕はその後を知らない。僕は再びあの村の豊かな姿が見られることを願っている。

幸せのその先へ

(ペンネーム) しまるん



私は本州にいた頃、北海道や泥流地帯のことはよく分かりませんでした。ですが、この「泥流地帯」に出会い、北海道のことがもっと知りたくなりました。

中学二年の時、まだ本州にいて北海道のことをよく知らなかった私はある知らせに衝撃を受けました。

「親戚のおじさんが亡くなって、両親が北海道の仕事を継がないといけない。」

とても衝撃的でした。親戚の人が亡くなって、私は膝から崩れ落ちてしまいました。泣きそうな気持ちと、自分が寄り添ってあげられなかった後悔とで頭が重くなりました。

「助けたかった」そう自分に言い聞かせながら、心が崩れる音がしました。

落ち込んだ私を救ってくれたのは、一人の友達でした。いつも笑顔で優しいその友達はまるで天使のような人でした。私は大切にしてください。親戚の人の分まで幸せになろうと思いました。

初めて「泥流地帯」を読み、耕作や拓一の大切な人を失った気持ちがよくわかるような気がしたのです。そのため、拓一が命がけで家族を助けに行くところは今でも心に残っています。それでも、家族を助けられなかった後悔はとて

も痛いと思います。諦めずに探し続けた拓一はすごいなと思いました。

「幸せ」と思う感情には人それぞれ違う考え方があります。私としては、幸せはいつかは突然訪れるものだと考えています。幸せには悲しみが対になっていて、誰かが泣いて悲しんでいる時には幸せが訪れるように、あきらめずに努力します。

福子は気持ちを我慢していたけれど、拓一は気持ちを伝えました。ですがなかなか進展できません。それを見ていた耕作と節子が、二人に勇気を与えようと努力します。

支えてくれた人たちのおかげで、福子と拓一は付き合い、幸せになるかもしれないと、私はそう思います。

泥流地帯を読んでみて

下村 将人



私が、この泥流地帯を読んだ感想は、本当に起きた事をもとに小説にまとめたので非常に読んでいて面白いと感じました。最初は全く興味がなかった私ですが改めて小説の良さが分かった気がします。

まず一つ目は、拓一と福子の恋愛シーンがいなと思いましたが。小説をなにも知らなかったこととタイトルが泥流地帯なのでつきり山の話だけかなと思っていたのですが、こういう恋愛エピソードもあって良いと思いました。

二つ目は耕作が最終的に福子の命を救ったことにとても感動しました。これを読んでいて私だったら友達どころか自分を守るのが精一杯だと思うのです。いなと感じました。

三つ目は、節子が耕作に好意を抱いていたことに少し驚きました。まさか好意を抱くとは思っていませんでした。面白く展開だなど思いました。

好きなセリフは、祖父の市三郎が言っていた「寝ていた人を起こすなかれ」というセリフが自分の中に非常にきました。なぜなら、本当にその通りだなど思ったからです。

他にも、「人間の偉さはな、物をどれだけ持っているかということでは決まらん。金をどれ

だけ持っているかということでも決まらん」です。それもとてもいいなと思ったのとこれから生きていくうえで大切な言葉なんだなと思いました。

最後に、この本を読んで感じたことは昔の本当にあった出来事なので非常に考えが変わりました。これからの人生でも今回感じたことを生かして生きていきたいと思いました。

じっちゃんが生きていたら

添田 のあ



私は、泥流地帯の登場人物の中で「じっちゃん」が一番お気に入りです。なぜなら、じっちゃんは耕作たちのことを考えていてくれるし、誰に対しても優しく知識量が豊富な、尊敬できる大人の代表格のようで、かっこいいなと思ったからです。そんなかっこよくて強かなじっちゃんが生きていたらどうなっていたかを二つ考えてみました。

一つ目、拓一がじっちゃんだけを奇跡的に助けられたけど、拓一と一緒に流木に頭を打ち付けられて、記憶障害になってしまう。そして、上富良野のことや家族のことを忘れてしまって、上富良野復興の反対側になってしまう。拓一は、じっちゃんを責めてしまい、距離をとってしまう。月日は流れ、じっちゃんの危篤を知らされた拓一は、じっちゃんの元へ駆けつける。すると、じっちゃんが「拓一、すまなかった。お前に失望させてしまって。すまなかった。」と覚えていないはずの拓一の名前を呼び、すまなかった。と、繰り返し言い続けて息を引き取ってしまう、悲しいエンドです。

二つ目、じっちゃんが何とか逃げ切り、傷だらけの状態で「良子とキワを助けられなかった。すまない。」と拓一と耕作に泣いて謝る。耕作

はじつちゃんのせいじゃない。と、慰めるが、拓一は何も言わずに立ち尽くしている。そして、葬儀を終えた皆で上富良野を復興するか話合っているときに、じつちゃんが「復興し、今後生まれてくる者たちに上富良野を残した方がいい。」と言っていたら、拓一が「俺もじつちゃんと同じだ」と言い復興を進める。しかし、老いと過労によりじつちゃんが体調を崩し、もう長くないことを医者から告げられる。耕作と拓一は「死なないでくれ、まだ一緒にいてくれ。」と泣く。じつちゃんはそんな二人を見て「お前らはあきらめず、ここに居る者たちを幸せにするんだ。」と、笑顔で言い息を引き取る。拓一と耕作は、泣きながら「じつちゃんがいてくれたから勇気が出たよ。俺たち頑張るよ。」と言い、上富良野の復興を進める。月日が流れていき、拓一と福子が結婚する。耕作は、二人のお祝いをしようと思い物に行くが、事故にあい亡くなってしまう。耕作の死を無駄にしないよう、拓一は上富良野を復興させる。悲しくも成し遂げるエントドを迎える。

私の中のじつちゃんは、耕作と拓一の背中を押すような人でいてほしいと思ったので、最終的に亡くなる事で、拓一たちの事を勇気づけて欲しいという願望を込めて書きました。

お話を考えるのがとても楽しくて、さまざままなエントドを迎える事ができるなと思いました。

泥流地帯を読んでみて、ここまで楽しいとは思わなかったのですが、この作品に出会えてとてもよかったです。

未来に繋がる小説

西塚 樹生



私が泥流地帯・続泥流地帯を初めて読んだのは、高校の授業でのことだ。正確に言えば生まれた時から泥流地帯に住んでおり、泥流地帯・続泥流地帯という本が存在していることは知っている。小学校高学年の時一回読んだことはあるが内容が難しく読むことを諦めた。しかし、高校生になって授業の中で読むようになり、大体の話を理解することができた。

その中で、印象に残ったことは、耕作が深城の娘の節子に石を投げつけた後の話だ。

耕作は、自分の母親の悪口を言われ石を投げつけたが、深城がかわした。が、後ろにいた娘の節子にあたってしまい怪我をさせてしまった。何年か経って豆腐屋で会った時に「石村さん、どうして私があなただのことが好きか教えてあげようか」と節子が言って額の傷を見せながら話した場面だ。傷をつけられてしまったら消えることもなくなる。お嫁にも行けなくなってしまう嫌いになるかと思う。しかし、深城の父に勇気を振り絞って立ち向かったことにより好きになったというところが印象に残った。もし、自分が深城の娘で、同じような場面になったら、耕作を嫌いになり、会っても喋ることをしなないと思うのだが、節子は変わった性格だと思った。

次に、終わりはこうなって欲しいということ  
が二点ある。一つ目は、拓一と福子が結婚して  
幸せな家庭を築いて終わってほしいなど思った。  
二つ目は、深城の父が昔起こしたことの報いを  
受けて、終わってほしいと思った。

今映画化が進んでいる泥流地帯、近い未来  
映画になり、日本中、世界中に広まりみんなが  
読む三浦綾子の代表的な作品になって欲しい  
と思った。

もし中学に行っていたら

羽澤 成未



この作品にはさまざまな分岐点があった。そ  
の中でも、私が思った最大の分岐点は、耕作が  
中学校に行けなかったところだと思う。

十勝岳噴火前、姉の富の結婚のため、耕作は  
中学の試験に合格したにもかかわらず、入学を  
断念した。しかし、十勝岳噴火後、富や妹の良  
子、祖父、祖母までが亡くなってしまった。この  
ことから、もし耕作が中学校に行っていたらど  
んなことが起きたのかとても気になった。

まず、耕作が中学校に入学していたら、富の  
結婚はなかったと思った。お金がないからだ。  
もし、姉の結婚をなくしてまで中学校に入学し  
たら、結婚相手の隆司からは罵倒の嵐を受け  
ることだろう。

また、富は十勝岳の噴火の際、硫黄鉱山にい  
たため泥流に巻き込まれて死んだが、結婚が  
なければもしかしたら鉱山にもいなかったかも  
しれない。畠で仕事をして死んだかもしれない  
など思った。

次に、耕作が高等科や師範学校に行くこと  
もなかっただろう。だから、耕作が先生になろ  
うと思うこともなかったかもしれない。もし耕  
作が先生にならなければ、今後の展開も大き  
く変わってくる。例えば、節子が中学に行けな

かった耕作を思っ泣くこともなく、中学に行  
ったことに大喜びしていたかもしれない。他に  
も、先生という仕事でなければ拓一と一緒に  
畑仕事をしていた可能性もある。泣かれること  
と喜ばれることでは耕作の、節子の気持ちの受  
け取り方も変わって、節子と耕作の関係性も  
変わるかもしれない。

このように、耕作が中学を選んだことで様々  
なことが変わってくるのだ。作中で一番人生の  
選択を強いられたのは耕作だろう。今とは違い、  
中学を選ばなかったことで将来の給料が変わっ  
てきたり、まず中学に入らないと目指せないも  
のもある中、こんなにも勇気ある決断を下した  
耕作をとて尊敬した。何度も自分の進路につ  
いて考え、きつと暗く悲しい夜もあっただろう。  
だが、若いながらも道を変えて、新たな目標を  
立て行動に移せるところや、その道でやってい  
くという覚悟が耕作にはあり、そのような人物  
の特長にも惹かれる。

私は今、今後の進路について悩んでいるが、  
耕作は小学六年生という若さで自分の今後に  
ついてしっかりと考えられているのがとても立  
派だなど思った。そして、将来について悩む耕  
作の姿にとて親近感がわいた。

それから、耕作も一人ぼっちで考えていたわ  
けでなく、兄や祖父をはじめ、周りの人間から  
助言をもらい、自分の進路を決めており、私も

周りを頼りながら自分のなりたい仕事に就けるよう頑張っていきたいと思える作品だった。

### 泥流地帯のその後

松田 悠来



噴火から数十年後、耕作は悩んでいた。上富良野の復興において、緑が増え、作物がまた育てられるようになることは、耕作のみならず、村のみんなの願いでもあった。そんな中で、耕作は教師の仕事の傍ら、学校の庭に小さな畑を作っていた。

「どうするべ。」

生徒たちが帰った後、耕作は鍬を持ち出して土を耕していた。と、急に後ろから声をかけられた。

「先生、何しているんですか？」

四年生の子だった。

「ああ、最近ここに畑を作つてな、こんな土地でも、作物が育つか見てみたかったんだ。」耕作は続けて言った。

「しかし、なかなか育たないもんだな。」

「へえそうなんです、僕の家の人も最近、畑に苗を植え始めたばかりなんですけど、なかなか芽が出なくて、みんな困っているんですよ。」

生徒は愛之助で、彼の家も当時の噴火の影響によって、作物が育たなくなってしまうていた。

「ところで、愛之助はこんな時間まで何してたんだ？」

「ああ、ええと、図書室で、読書をしていました。」

「なんで？」

「僕の家、最近不作なんで、どうやったら元気に育つか、本になら書いていると思っただけです。」

その言葉を聞いた瞬間、耕作は昔の自分を思い出し、黙ってしまった。

「どうしたんですか？先生。」

「いや、なんでもない。」

「そうですか。それじゃ、もう時間なんで、僕は帰りますね。」

「おお、気をつけてな。」

その日、耕作は一日中畑のことで眠れなかった。

翌朝、耕作は舞い上がった。なんと畑にまた種が芽吹いていたのだ。

「みんな、今日は見せたいものがある。」

耕作は授業の一環として、自分の作った畑を自慢げにみんなに見せた。そんな耕作に乗せられて、みんなも目を輝かせて見た。

「今日これをみんなに見せたいのは、一から畑を作るっていう事の大変さを伝えたかったからだ。」

「むかし、ここに開拓しに来た人はみな、この苦労を味わってきた。今までみんなこうやって暮らしてきたのも、先人たちのおかげだ。もちろん絶対という事はない。だが、多くの人がこの

村に関わってきたという事を、知ってほしいんだ。」

「いつになく真剣な耕作の表情に、みんなは黙って聞いた。」

「それで、ここからが問題だ、芽が出てきたのはいいが、ちゃんと実がなる保証ができない、だから、今日はみんなの力を借りたいんだ。」

「それで――」

数か月後、耕作が作った畑には、元気に育った作物があった。畑の周りには柵が設置されており、そこには誇らしい耕作と生徒たちの姿があった。水をやった後のごぼうが、より一層光って見えた。

出会えてよかった

松谷 心



泥流地帯。私はこの題名を聞いたときに、十勝岳が噴火して悲しい話だと思っていました。授業でこの本を読み進めていくと、最初は少女の喧嘩やかわいい話でした。ですから、私は泥流地帯という題名を忘れて読んでいました。すると突然前編の最後の方で噴火が起こりました。そこから、話はとても重い話に変わっていききました。登場人物みんなに色々な試練が待っていて、思い通りにならなくて読んでいて悲しいものでした。

私が一番悲しいなど思った所は、拓一と福子の恋愛でした。現代の話ではないため、借金などをしていると子どもが売られてしまうというひどい時代でした。福子もその一人で、自分の恋愛もできずに売られてしまいました。私は読んでいてそんなことがあっていいのかと思いました。福子の立場になって考えてみるとそれで家族が暮らしていけるのなら、売られてもいいと思いました。ですが、私が幼いころにこれほどの大きな決断はできなかったと思います。授業ではラストシーンを読んでいないのでその時は拓一と福子は結ばれ、耕作と節子は結ばれないと考えました。拓一と福子は節子や耕作の強い思いもあり、二人で生きていくと思

ました。ですが、耕作と節子は自分たちのいる場所などが関係してそれぞれ違う道に進んでしまおうと思いました。私はどちらも結ばれてほしいと思います。

実際にラストシーンを読んでみたら、福子と拓一が結ばれたかどうかはわかりませんでした。ただし、福子は深城のところから抜け出して終わっていました。ですが、節子と耕作の話は全くなく終わってしまいました。私はそのことをとても悲しく思いました。ただ、みんなが生きている以上この後に何か良いことが起こってほしいと思いました。

私が泥流地帯を読んでいて思うことはどれだけ頑張っても掴みきれない幸せが存在しているということ。そして地元愛に溢れている人が多く、自分たちで試練を乗り越えてよい人に変わっていく成長のドラマだと思いました。噴火など時代は昔というところは重ねることが不可能ですが、一人の登場人物と自分を重ねると自分を再度理解するとてもいい機会にもなりました。私は、泥流に飛び込んでいった拓一と自分を比べました。私は長女ですが、泥流に飛び込んでまで家族を助けられないと思いました。私と拓一では覚悟の違いがありました。これから小説を読んでいく中で自分と登場人物を比べて読んでいこうと思いました。私は泥流地帯を読んでもよかったです。

思いました。少し長い小説で最初は読むことを諦めていましたが、今は自信を持ってまだ泥流地帯を読んでいない人に勧められます。

私は生徒会執行部やソフトテニス部、アルバイトなど毎日忙しく充実した生活をしていると思います。ですが、この小説を読んで、忙しすぎてたまに身近な人の大切さを忘れてしまっていることに気が付きました。これからは、日頃から身近な人に感謝を伝え後悔のないように生きていきたいです。

### 泥流地帯が地元の人々の感想

宮尾 星



私は泥流地帯を読んでみて思ったことや感じたことがたくさんあります。その中でも四つを紹介いたします。まず一つ目は、十勝岳が噴火するまでがとても長いことです。ただ長いといっても悪い意味ではありません。私はこの長さだからこそ作品が成り立っていると思いました。長い中にとっても内容が詰まっている、無理矢理ではなく自然な感じで噴火へ繋げ読者の興味をより一層沸かせて、最後まで読んでくれるように仕向けられている感じがしました。

二つ目は、上富良野の歴史を学びながら恋愛物語なども楽しめる、ハイブリッド作品だと思ったことです。この作品全体を通して楽しめるのは、まず一番は上富良野の歴史だと思えます。ではその次は何かと考えてみると、福子と拓一の恋愛や節子と耕作の恋愛だと思いました。

三つ目は、噴火直後からの物語がとても感動的だったことです。まず噴火直後でそれまで出てきていた、祖父の市三郎や祖母のキワそして妹の良子の死、そこから生き残った拓一、耕作の上富良野復興への思いが、読み進めていくにつれ感じられて、その気持ちのおかげで今の上富良野があるということを考えて、とても

感動しました。

四つ目は、節子は深城の娘ということで、嫌なやつなのかなと思っていたら、文中で耕作達と関わっていく中で、実はとてもいい人と知って驚いたことです。耕作を思う気持ちや耕作のことで泣いたり福子への対応で本当にやさしい子なんだなと思いました。

最後に泥流地帯を読んでみて、今まで歴史をあまり知らずのほとんど生きてきましたが、色々な人が血と汗を垂らしながら、上富良野を復興してくれたことに感謝し、これから生きたいと思いました。そしてこの小説を読むという事は、上富良野の歴史を楽しみながら学びのような気持ちで上富良野を復興したかを考えるということだと思いました。

## 泥流地帯の衝撃的だった五つのポイント

村上 大和



私は、泥流地帯を読んでみて面白いと思ったことが、五つあります。

一つ目は、主人公が成長しているのを実感できることです。拓一は物語序盤では、夜のトイレにすら行けず、市三郎に「拓一の意気地なしが」と言われていたのに、いざ泥流が来て家族が流された時、その頃には泥流に飛び込む勇氣を身に付けていたことが印象的でした。

二つ目は、主人公が二人いることです。拓一と耕作のそれぞれのストーリーがあり、関係している人物も違ったので、一つの本で二つの物語を読んでいるような気持ちになりました。また、最終的には二人の関わってきた人物同士が出会い、会話をしていたり、伏線回収があったりして、その部分で面白さを引き出していました。

三つ目は、主人公に苦難を与えてきていることです。福子が売られたり、母親が家に帰ってくる日が近い時に、泥流が流れてきたりなど主人公のストーリーに突然大きい壁が出てくるのが、よくてきていると感じました。

四つ目は、良い人ばかりではないという事です。曾山や深城の親父は、作品中では良いところがなく、主人公とは立場が対立しているので、

話を盛り上げる要素の一つになっていて、面白みがあると思いました。

五つ目は、悪いことばかりではなく、時々主人公にとって良いことが起こるようになっていくことです。偶然訪れた豆腐屋に売られた福子がいったり、泥流から助けた女性が福子だったりと主人公にとってプラスになることが起きるようになっていく点も面白いと感じました。

この泥流地帯という本は、話や人物たちの関係性が複雑で少し難しいと思うところはありましたが、舞台が上富良野なので上富良野駅や深山峠、上富良野神社など、上富良野に住んでいるなら誰もが行った場所の名前が出てくるのは、今も訪れることができる地元民だからこそその面白さを感じることができました。

泥流地帯の最後は福子を深城父の近くから逃がすために、旭川行きの汽車に乗せそこで物語が終了しますが、私としては、最後は福子のためらわず拓一と結婚して、それに続き耕作も結婚し、ハッピーエンドで終わってほしいと思いました。次また読む機会があれば一人でゆっくり読み進めてみたいとも思いました。

資料編 史実としての『泥流地帯』

〜上富良野村、壊滅ス〜

“二度の開拓”を果たした奇跡の町・上富良野の

壮絶な実話から生まれた『泥流地帯』『続泥流地帯』

小説『泥流地帯』が誕生したのは作者三浦綾子さんの夫であり口述筆記のパートナーである光世さんがきっかけでした。三浦夫妻の住む旭川と上富良野は一時間足らずの距離。近郊での出来事でもあり営林署勤務時代から関心の高かった十勝岳噴火災害について、聖書に記されるヨブ記になぞらえ、人間の苦難をどう受け止めるべきかをテーマとした作品の執筆を綾子さんに勧めたそうです。

執筆にあたり三浦夫妻は「悲劇と奇跡の地」上富良野町（被災当時は上富良野村）を幾度も訪れ、災禍の痕跡を巡り当事者から熱心に話を聞きました。執念ともいえる取材の果てに作品に織り込まれた現実の「上富良野」と「十勝岳噴火災害」についてご紹介します。



「泥流地帯」文学碑(草分地区)と三浦夫妻

■上富良野町(上富良野村)

上富良野町は北海道中央部、十勝岳をはじめ三方を山々に囲まれた盆地に位置する人口約一万人の町です。

入植開始は明治三十年。三重県の団体が草分地区

(物語中、吉田村長や移転後の石村家があった地域)

に足を踏み入れたことが始まりです。



上富良野町

初夏を彩る町花ラベンダー、盆地特有の寒暖差で甘みが増したメロン、ビール原料となるホップと大麦、全国のホテルやレストランで愛されるブランドポークや和牛などの豊かな農畜産物、そして道内最高標高、雲上の温泉郷や色鮮やかなパッチワーク丘陵など、広大な火山帯特有の、大自然の恵み豊かな地域です。

■活火山、十勝岳

十勝岳(上富良野町ほか／二〇七七m)は大雪山国立公園南部、十勝連峰の主峰です。日本百名山に名を連ねる秀峰であり、富良野岳、上富良野岳、美瑛岳などを巡る登山コースは多くの登山客で賑わいます。連峰ではもともとも若い(新しい)山ですが、現在も数十年おきに火山活動がみられる活火山です。

■大正噴火(大正十五／1926年)

豊かな恵みを享受する一方で、大自然は時として人知を超えた脅威をももたらします。

物語の題材となったのは大正十五年五月二十四日夕方に起きた十勝岳の大規模な爆発です。山体崩壊とともに溶岩や熱せられた大量の地下水などが噴出し積雪を融かし、土砂や流木を呑み込みながら泥流となつて麓の村を襲いました。



大正15年9月爆発時の噴煙





【写真①】捻じ曲げられた線路



【写真②】泥流に押し流された巨岩



【写真③】僅か4日後に仮運行した鉄道



【写真④】流木で埋め尽くされた田畠



【写真⑤】軍用トラックを借上げて客土作業

## 巨木の“とんぼ返り”

最も甚大な被害をもたらしたのは「富良野川」に沿って流下した泥流です。平常では水量が少なく穏やかな川ですが、下流域では長い年月をかけて沢地を形成していました。拓一や耕作らが住む日進の沢のモデルとなった「日新の沢」です。小説にもあるように狭いところで幅百メートルほどの沢に押し寄せた泥流は高さ十メートルを超え、火山噴出物だけでなく土を削り岩を砕き、その勢いを増していききました。根こそぎ引き抜かれた巨木が数百、数千と「とんぼ返り（縦回転）」しながら押し寄せた」と多くの被災者が語っています。

## 拓一が飛び込んだ「泥流」の威力

土砂や樹木を飲み込みながら押し寄せる泥流の威力は凄まじく、ひとさき高く土盛りされた線路は泥流の勢いを大いに弱めたものの、レールは枕木ごと飴のように捻じ曲げられ【写真①】、七十トンに迫る巨岩は旧石村家よりやや下流まで流されました【写真②】（現在この巨岩は記念碑の土台として爆発記念駐車公園に設置されています）。泥流の脅威を象徴する二枚の写真からは、泥流に飛び込む拓一を目の当たりにした耕作の深い絶望が感じ取ることができます。

## 人海戦術による驚愕の復興速度

鉄道の損壊は著しいものでしたが復旧の勢いも凄まじく、被災翌日から数百人の工夫が動員され、四日後には貨客を満載した列車が仮運行されました【写真③】。これにより各地から支援助物資や救援隊が押し寄せ、応急処置のみならず復興の動きが大きく加速します。

## 二度の開拓、奇跡の復興で取り戻した美田

また、作中で描かれるとおり田畑の復興作業は困難を極めました。マッチ箱をひっくり返したように辺り一面流木で埋め尽くされ【写真④】、さらに一メートルを超える泥土に埋まったかつての美田の復興には、近隣の丘や被災を逃れた農地から土を運搬し、上に敷き詰める「客土」という方法がとられました【写真⑤】。さらに強い酸性の土地を中和し作物が芽吹く土に改良するための作業が何年も続けられ、ついに耕作が「死んでいる」と嘆いた泥海に再び青々とした稲を根付かせることに成功しました。

現在の上富良野の、豊穡な稔りと風光明媚な景観は拓一や耕作が思い描いた「百年後のふるさと」そのものです。

## ■石にかじりついても

上富良野村長 吉田貞次郎

物語に登場する吉田貞次郎村長は実在の人物であり、拓一や耕作らとの会話などを除き、作中では実際の言動や自身を巡る出来事などがリアルに記されています。

吉田村長は三重県一身田村(現津市)に生まれ、十六歳で家族とともに北海道に渡りました。二十五歳から村議会議員などを歴任し、大正八年、三十四歳で初代村長(二級町村制)に就任し、四期十六年にわたり近隣に名を轟かせる名村長として村政をけん引しました。

奇跡と称される泥流災害からの復興を果たした後、昭和十七年の衆議院議員総選挙で初当選。衆議院議員を一期務め、昭和二十三年、六十三年の生涯を閉じました。



吉田貞次郎村長

## ■実在の人物とエピソード

作者三浦綾子さんの緻密で膨大な取材にもとづいて描かれたこの作品には、吉田村長以外にも実在の人物や出来事、地名が数多く登場します。

○吉田てい、弥生姉妹・・・吉田村長の子。ていは晩年、上富良野町内で災禍の語り部として多くの教訓を残す。

○菊川政雄(菊川先生)・・・日新尋常小学校の人望篤い教師、菊地政美教諭がモデル。検定試験で留守中に十勝岳が噴火し泥流により家族や教え子

を失う。

○和田松右工門・・・後の上富良野町長和田松工門(昭和四十六～五十八年在任)。拓一と同年輩の青年団長として登場。

○その他実在する人物・・・飛沢先生、船引武、水谷甚四郎、小林八百蔵、沼崎重平、久野専一郎、佐野文子 など

○三重団体・・・三重県からの入植者団体。勤勉実直、村民からの信頼が厚く、開拓のみならず政治・経済など多面で上富良野の発展をけん引した。

○日進分教場(日進の沢)・・・日新尋常小学校(日新地区)。泥流により流失したが六月に四キロメートル下流に移転し授業を再開した。

○上富良野尋常高等小学校・・・現上富良野小学校。作中登場する小学校では唯一現存する。

○旭川中学・・・耕作が受験した旧制中学校。現旭川東高等学校。

○糸屋銀行倒産事件・・・大正十五年五月二十四日、奇しくも十勝岳噴火と同日に経営破綻した旭川の銀行。市街の者や農民にも預金者が多く泥流災害に加えて村民に甚大な経済損失をもたらした。

## 実際に災害記録に記載されている逸話

- ・下半身のみ発見された炊事婦 (正「煙」の章)
- ・身内が近づくとも鼻から血を流した遺体 (〃)
- ・逃げられぬと観念して家に残り助かった老夫婦 (〃)
- ・屋根に乗って全員が助かった家族 (続「移転」の章「大川くん」)
- ・9人全員が犠牲になった家族 (〃 「佐戸部」家) など

## 〈参考文献〉

『十勝岳噴火泥流災害九十年回顧誌』『郷土をさぐる (第三号、二十号)』  
 (上富良野町郷土をさぐる会) 『十勝岳爆発災害志』ほか

第6回『泥流地帯』作文コンクール作品集

2026年3月発行

発行：『泥流地帯』映画化を進める会

事務局 北海道空知郡上富良野町大町 2-2-11

上富良野町企画商工観光課内